

論理学の原理

Wilhelm Windelband 著 竹佐哲雄 訳

訳者序説

この論文は一九一二年にアルノルド・ルーゲに由つて公にされた哲學的學の百科辭典 (Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften) の卷頭に載せられている。著者がここに於いて論議の對象に選び來つたものは、形式的論理学が説くところの煩瑣な第二義的の思惟形式ではなくて、寧ろ認識論や理論哲學と關聯し彼此相交錯し流入する思惟の深き形式に關するものである。何となればヴィンデルバントにとつては論理学は單なる形式的論理学ではなく、寧ろ深き實在に關する純粹思惟の學として、哲學と形式的論理学とを結び付けるもの、根原的思惟の形式に關わるものである。

氏がここに於いて有つてゐる四つの問題のうちその一つは生ける具體的に見たる知識を明らかにすること即ち知識の現象學を取扱うことである。かかる學はその論究の目標を論理的研究の準備に置いてゐるから、ここに論理学の諸原理を求めようとする人は、恐らく失望に陥ることと思う。ここにはただ質料のみが取扱われている。原理的なもの形式的なものは、直接なる體驗に於いてその具體的狀態を表してゐる。即ちそこでは形式と内容とが事實的體驗的ニュアンスを伴つて示される。吾々はこの裡にデイルタイの或る思想やナトルプの再構成の望む或る對境を偲ばしめるものがあると思う。

ここではまず認識に対する心理学の価値を定めることから、延いて論理的術語の確定に対して有するところの心理学の課題が明らかに描き出され、随つて問題が個人的「是認」の要素の鮮明から社会的「是認」の要素へと進展して行つた。この進展はこの裳に思惟形式と言語形式——論理学と文法との關係を蔵している、同時にまた妥当 (Geltung) の意味が各科学の内における論理的要素の点出によつて輪廓を与えられた、その精緻な彫出はしかし、最後に實在の内容に對觀せしめた後に初めて完成されるのである。かかる幾回かの論理的旋回の後、この問題は知識の最終の原理としての綜合の原理に由つて、この部門の頂点を飾るに至つた。そして形式と内容との深き關係は、たといその克明深原な解明をば最後の部分に俟つにもせよ、ここからその源流を發している。この最初の部門に企てられた研究は、もとより氏の他の論文に比して斬新ざんしんなものである。

第二の問題は上の如き生ける具體的思惟から出發するのではなく、抽象的な思惟の形式から一つの目的に向つて進む。目的はこの場合、個々の内容特殊の対象を全く顧慮することなしに一般の思惟形式を、即ち真理形式を明らかにする点に存している。それゆえにかかる問題の性質は自ら論理学を限定して單なる思惟を研究するものではなくて真理を理想とする思惟形式を研究するものたらしめ、その点からして規範的の性質を賦与した。規範的の性質は妥当の性質を明らかにすべき誘因を与える、しかして氏はロツツェに流れを汲みつつ自ら新なる立場をとつて、一貫した理論によつて思惟の四原理を統一的に究明した。吾々はこの点に氏の範疇論の源流を見出すのである、また氏の範疇系列を統觀すべき頂点はここに存する。かくて氏は判斷の性質分量關係様相の各々に精査を加えた後、關係のみを対象構成の力あるものと考え、カントの判斷論

の批判を加える傍、^{かたわら}筆を対象に関する形式即ち範疇論に進ませた。氏は範疇の系列を立てる際に意識と存在

の關係を根拠として——余はかかる対立に由つて範疇系列を立てることに關しては若干の疑問と反對の意見を有する（余の論文「範疇に關する若干の思索」哲学雜誌三八六号一九——六五頁参照）——反省的範疇と構成的範疇とに分つた、そして前者では通常の形式的論理学で論ぜられる諸形式を鮮かなる概観と簡潔とを以て論ずると共に、後者では實在を構成する対象の諸形式、諸の範疇系列を巧に組織的に秩序付けかつ深化した。範疇に關聯して重要なそして或意味では範疇に活動の動因を与えるところの時間空間の形式が、意識形式から實在形式に移る段階を示すものとして、中心的位置を占めていたことがまたここに述べられている。これらに關する敘述は氏の他の論文「範疇の体系に就いて」「自同と相等に就いて」及び著書「哲学概論」の一部に同様に論ぜられているが、この論文の如くに包括的洞觀的ではない。形式的論理学の諸原理を明らかにすることを唯一の目的とする人にとつては、この部門が最も大なる価値を有するものと見られる。

吾々は次に眼を第三「一次空白」「の」問題に転ずる。方法論の初めの部分は歸納法や演繹法の意味を尋ね、推論式の問題から歸納の最後の予想として自然法則性の公準に達しているが、併しそれはただ一般論理学の方法論の精神を平明概括的に論じているにすぎない、しかるに第二の部門は氏の新たな科学論に關する透徹せる思想を述べたものとして、鮮やかな特色を具え新たな興味を湛えている。この部門に於いては、凡ての科学は綜合的概念構成に由つて生産されるという思想に基づいて、先ず対象の論理学が説かれている。單なる思维形式が生ける作用として、各の科学に對する關係が明らかにされ、これによつて論理学と個々の特殊科学との間に或る連絡が見出されたことは、氏の鋭い洞察力を語ると共に大なる業績として伝わるべきものである。

る。氏の哲学の根本的モチーフをなせる思想、西南学派の最も貴き血潮としてその哲学的脈管に流れているもの、即ち法則科学と事象科学の対立、自然科学と文化科学との峻別は、ここに論理学に關係されて深き根柢を表している。殊に人間の知識の学としての歴史学が方法論から明らかにされていることが、この部門の最も重要な生命に満ちた叙述を構成している。ここに論理学は各の科学の特性を明らかに認め、そしてこれらと互に手を携えている。

吾々は今最後にしてしかも最も探き側面を展示せる問題の前に佇む。認識論の目的はその本質に於いて知識の普遍妥当性を明らかにする点に存している。それゆえここでは意識と存在との予想の基礎と考えられるところの關係、即ち普遍的知識が現実在 (Wirklichkeit) に対して有する關係が、問題の中心点に移されて来る。古からこの問題に向つて試みられた本体論的傾向形而上学的傾向から、吾々は転じて批判的方法に向う。前には科学と互に手を携えた形式的論理学が、ここでは更に知識の妥当を論ずる認識論または理論哲学への或る橋梁を見出すのである。形式的論理学が常にその個々の問題の徹底的研究に於いて逢着する限界、即ち認識論的難点は今のこの部門に於いて初めて解決の曙光に接する。

認識論の最も困難な点は思惟されたものと存在との關係である。この解決の努力は古の哲人を探き悩みに陥らしめた、プラトンやストアに基づく存在の二元的解釈からカントの超越存在の思想に至るまでの径路は、この探き哲学的悩みの解決を求めている諸相の一面である。併し此深き悩みがカントの意識一般の思想からロツエの妥当の思想に由つて、妥当と存在との対立から匿せられるように種々の努力が行われた。この途はしかしバークレーの神、フィヒテの我、ヘーゲルの理念に到るものである。そして妥当と存在とは再び形

式と内容との問題に転入して、第一の問題を深き哲学の問題から明らかにする。

余はこの論文に於いて驚くほど鮮かな論述の仕方を見る、それは恰も巨匠に由つて彫琢された芸術品からうける或るものに似ている。種々雑多の問題未解決の材料をかくも包括的にかくも簡潔に、しかもかくも深き泉から獲来たるが如くに論じたものを、余は未だ嘗つて見たことがない。まことに哲学の魂に自らを沈潜せしめその生命を汲み来つて自らの体験となした氏の如き哲人でなければ、かく快刀乱麻を断つような明快と鋭さとを一面に示しつつ、しかも他面には汲み尽し得ない深みを保つことはあり得べからざることの如くに思われる。余はこの論文に於いて著者の自由に生きる魂を感じる。この論文はその魂の幽かな息である。余はただ余の貧しい語学の力と拙文とが遙にこの魂を描き出し得ないことを憾みとする。

目次

- 一 知識の現象学
- 二 純粹或は形式的論理学
- 三 方法論
- 四 認識論

論理学の原理

制限ある紙面に於いて論理学の諸原理を論じようとする試みは幾分か危険を伴わないとも限らない。何となれば論理学にあつては次のことが爾余の学科におけると全く同一であるからである、即ち原理はそれに関わる学科の具体的な説の基礎付けや秩序や形成に於いて、表れるようになってこそ、初めて原理としての意味と価値とを有するものである。原理そのものは其概念の性質上他から導き出されないものであるから。原理の自明性はただ、この原理によつて統一的に且つ普遍的に規定さるべきところの特殊のもの及び雑多なるものに対する原理の妥当に依つて生ずるのである。

しかし原理を他のものから引離して列挙することは、已に根本的組織に或る確実と一般的是認とを得ている個々科学に於いては、比較的容易で且つ危険を伴わない。「論理学」に於いても、約一世紀半前、即ち論理学が堅固な建築の如くアリストテレスの基礎の上に立つて、一々實際に取扱う場合にのみ、多少その組織の形相や選び出して来る部分の組立やの相違が、時に応じて試みられているにすぎなかつた時代には、恐らくこれと同じ状態であつたろう。併し今やこの状態はカントによつて明らかに根柢から一変された。批評哲学の齎したところの先験的見方によつて論理的問題が拡張されたことは、諸原理の全体的推移のうちの僅かにその発端にすぎない、この原理の推移は其後に至つて種々なる方向に行われ、而も一部分は相互に反対した方向に行われた。論理学の現状は明らかに、統一的な且つ全体を支配する組織を立てることには反対な

傾向を示している、即ちその組織の諸原理は互に融入し動搖して、論理学に行われている諸の反対説も、一々の説に関するものよりも、根本的の立場及び方法上の問題に関することが多い、されば個人がこの最も困難な問題に関して代表するところの或る見解は、もしそれが特殊の研究材料を有効に形像となし得なければ一般的討議によつても論立されることは望まれない。

それにも拘わらず余が——好んで試みるのではないが——論理的問題の批評的検査を公にしようとするならば、この試みを為さしめる所以は、余が従来論理学の種々の取扱い方に対してとつていた關係に由るのである。この種々の取扱い方は各々、現今の複雑混沌たる哲學的運動の裡に、其根源に於いて或る正当なる権能を以て發展したのである。少くとも凡ての取扱い方が確かな理に叶った点を有つていないならば、かく正当に發達することを考えることは出来ないであらう。或場合に於いて正当なものが唯一の妥当なるもの全体の真理であつて、其他のものをば排斥し去るべきであると考えるときに常に、半面をのみ見るところの誤謬が始まるのである。可成かなり長い間異つた立場相互の間の論議を注意し、而も自ら論議に關係したことのある人ならば誰でも、論理学の大なる諸の問題を悉く解決するには、他日種々の取扱い方全部を調和することが出来て初めて可能となると信ずるに至るであらう。この問題全体は其本質が内面的且性質的に雜多であつたがために、種々の取扱い方が起つて来ねばならなかつた。しかし勿論この取扱い方の調和は、相互の生柔しい結合や折衷的な不決定に委しておくというのではなくて、それは却つて体系的全体性を論ずるものである、ここでは根本の問題から出發して、種々の特殊問題やこの対象によつて要求された問題解決の原理などの整然たる秩序が、この体系的全体性の裡に於いて系統的に開展されるべきである。

加^{しからのみならず}之先^{すなはち}ず論理学の問題を、其の最も広い意味に解することが確かに必要である、この意味では論理学は、理論的哲学一般と一致する——即ちそれは知識の哲学的の論として、理論的理性の理説として (als philosophische Lehre vom Wissen, als Theorie der theoretischen Vernunft) 解せられることが必要である。「哲学」の古代に於ける分類に於いて物理学として表したもの、即ち形而上学的自然哲学的の説は、カント以後の思索に於ける認識批判や知識学の範囲には属しないのである。そして吾々が認識批判や知識学を論理学の本質的な要義と考えるならば、論理学はそれ故に全理論的哲学の総和を表すことになる。とは云えしかし、論理学の問題全体が種々の立場から、その立場の理解せる方面に随つて形成されたところの半面的の問題に、狭められてゆくようなことはあり得ない。また他方に於いてこの個々の立場が其特殊の權利と歴史的可能性とを有するのは、一々の立場が自己の立場に於いて知識の哲学的理説と体系的に連絡し基礎付けられているからである。

何となれば批判的方法——哲学に対しては其他の学から厳密に區別された独特の問題と独自の研究範囲とがこの方法に由つてのみ規定されて来るのである——という意味に於いて、哲学的思惟が人間の理性活動——歴史の過程に於ける文化生活の全複合体はこれから發達して来るのである——の研究に向うようになり、随つて文化生活に於いて普遍的な人間の特種の特種な条件より独立な純内容的な而も、其自身基礎を有する理性内容が如何なる範囲で意識され、妥当するに至るかが研究されるようになる。其故に只三つの哲学的根本の学がある、即ち表象すること意欲すること及び感ずることの心の根本活動に対応して、また科学と道德と芸術の文化の形式に対応して、論理学倫理学及び美学がある。しかしかかる学科の各々に対しては人類の全

生活に於いて、それら各自に属する心的機能と歴史的形像の全体とが經驗的に与えられる、そして哲学の批判的考察はこの經驗に合せる根拠からして、人間の自然的及び歴史的なる複合体の所産に於いて包括的な妥当を有する理性内容が生ずるか否か、もし生ずるとすれば其範圍如何を決定するに至る。

偕て以下に於いて哲学の理論的部門即ち論理学に対して、後天的より先驗的への道の主要なる点だけが略述されるならば、そして上の仮定が適當するならば、吾々は論理学を取扱い得、また従来も取扱つて来た種々の立場を、此の開展の必然的な屯所【“Esaperi”ステージ】と定めねばならない、そしてその場合、全体の体系的關係より凡て個々の立場に対して、其權利並びに權利の限界が明らかにされねばならない。

一 知識の現象学 *Phänomenologie*

經驗的質料は哲學的学科に対して形式上二重の形式に於いて、即ち一方では前科學的意識の直接なる多數の體驗として、他方では概念——已に經驗的科學はこの概念から發達した——の秩序的體系として表れた。されば倫理學は總て個人の熟知せる意志生活の經驗、及び風習や法律關係に於ける道德的評價及び一般の形像とを取扱っている、しかしまた心理學が動機の過程に關して、法律が法律關係の歴史的體系的形像に關して、人類學及び歴史學が儀禮の發達や、凡て個人意志と全体意志の間の關係の種々に變化する形象に關して教える所のものをも倫理學はまた同様に論じている。

哲學的理論に対する經驗的質料の他の二重性は材料上、人間の悟性活動が一面に於いては個人意識の合自然法則的な到る處に同一な機能として存在し、他面に於いては人類の歴史的全生活の結果として存存【存在】する点に表れている。されば直観すること及び感じること、觀照することと創造することとの過程が一方に於いては哲學的美學の与えられた材料となり、また他方に於いては凡ての民族における芸術の作品と民族の成立及び其評價の歴史的關係とが、その材料を構成するのである。

二つの區別——體驗又は經驗的理論に於いて与えられたものと、同様の心的自然物又は史的に異なる人間の習俗に於いて与えられたものとの區別——は明らかにその限界に融入はあるにしても尚知識の現象學に於いて維持されている。我々はこの言葉（現象學）を解して、理論的哲學としての論理學に与えられた假定を形

成するところの知識の經驗的現象の總体とする。吾々が先ず知識について論ずる場合に、吾々が凡て直接體驗をもつて考える所の周知の個人的意識過程の裡にこの現象を見出すのである、又經驗的科学殊に心理学が此過程の記述や因果的説明に發展せしめたところの諸の理説の中にもこの現象を見出すのである。然し論理学の基礎になっている諸の事實は、進んで人知の歴史的形式を説示するところの諸の科学の全体そのものに与えられている、そして已に歴史的の過程に於いて論理的考察が知識及び科学の本質意味及び価値を確めようとする総ての努力は、この諸の科学の内に科学に即して發達した。

さて吾々がこの知識の現象学の種々の段階を批判的に通過しようとすれば、総ての論理考察の基礎となつてゐるところの基本的事實から出發せねばならないであろう。この基本的事實とは、吾々が表象の間に真なるものと偽なるものとの価値の區別を設けることである。しかしかく非常に一般的意味の論理学の根本假定が恐らく到る處では認められうるならば、それは種々の要素に一層精密なる規定を要することが直に明らかになる。何となれば一方に於いて、真及び偽という論理的な価値區別が応用されるのは如何なる特殊の表象複合体であるかが問題となるからである、また他方に於いて或る心的複合体に真理の価値を是認し或は拒否するならば、それに關聯して吾々の考える所は實際に於いては容易に一致し得るかもしれない、が一層精密に、この評價作用【Wertung】^{ウエルツング}の意味を明らかに規定しようとすれば、忽ち種々の困難——これは論理学の最後の而も最微妙の問題發達によつて解決される望がある——に陥るからである。されば已にこの現象学的の最初の階段は、最終の問題を洞察しなくては取扱われ得ないこと、並びに総てこの經驗的段階に強固に留まらんと欲する試みは総て不十分であるということが初めから明らかである。

先ず論理的問題の心理学的取扱ひに對してこのことが当てはまる。心理学的取扱ひは凡ての場合に於いて、最初の根拠を形成せねばならない。何となれば認識すること及び知識することは疑もなく先ず初めに心理的過程の形で吾々に知られている、されば哲学は心的過程に對して常々哲学独特の取扱ひ法を適用していても、尚各人に知られたる体験を確實な精密な表現に於いて予想している。心的活動の個々の種類及び諸相の表現が凡ての言語に於いて不定であるほど尚、この体験の要求を欠くことは出来ない。普通の話方に於いてかく不定の状態にあるのは、精密と優美——これによつて心的生活の雑多性は種々の段階に分たれ互に纏綿羅織てんめんらじよく【織り合ひ】されるのである——という点からは全く正当なことで、且避け得ないことである、されば論理学（またこれから推して倫理学も美学も同様に）が心理学のこの準備に就いてなすべき第一の期待は、確實な一義的な術語【底本では圈点なし】を作ることである。論理学にすらこの要求は未だ完全に解決されていない。例えば上の如く、論理学に於いてその真理價值が取扱われるところの表象複合体があつて、それが如何なる種類であるかを問うといわれた場合には、其際の「表象」なる語は一般の（恐らくカント及びヘルバルトの）意味に用いられている、この意味によれば表象なる語は、意識の理論的な没趣味的な機能全体を意味しているので、かの感情又は意欲として表れるような情緒の趣味中心の状態とは區別されている。併しこの広い意味の「表象」は、一般に採用されているものから可成隔つてゐる、心理学者や論理学者の間にあつても多くの人は、表象することを狭義に解して直觀的表象作用として思惟に對立させてゐる、即ち吾人は或るものを思惟しうるが表象し得ないというが如きである。かかる悲しむべき術語の不一致は勿論論理的の不確實に基づくものであるが、それはまた心理学が頗る長い間、一般的問題及び理説の頂に位するものとして哲學者から

取扱われたのにも関係している。心理学が哲学より全然独立せる經驗的科學となり、それで哲學者と共同勞作の連續的行進をなすようになって始めて、論理学（及び一般哲學）は經驗的科學から受けねばならない心理的事實に關して、今日數學や物理学から概念を受ける際のそれと同様の精密と一義性を以て語りうるに至るだろう。それが達せられない間は凡ての論理學者は、自己の研究及び一義的理解を確立するために、必要なる心理學的根本概念を出來うる限り嚴密明晰に其頂點に置かねばならぬ。

其際論理的目的に対しては、先ず体系的術語を論ぜぬばならない、これが記述的心理學の任務である。しかしかかる形式的秩序を科學的に満足にするには方法論的の根柢から見ると只發生的方法に依てのみ得られ且つ其礎付けられるのである。それ故に論理學にとってはこの論理的・心理學が全く無關係であることは出来ない、それは初めから如何にして又如何なる屯所に於いて認識及び知識が表象生活の基本的起始より最高の而も最も意義ある作用として發達するかを研究するようになっていた。この精神發生的研究の主な假定は、ロック以來殆んど自明的に妥當し、只稀れにしか疑問とならなかつた意見である、即ち吾々が各自の意識體驗の常に雜多なる内容に分析を施して得て來るところの最後の要素は、簡單なる要素として意識體驗の成立に先行しているということである。さればこの意味に於いて感官感覺は、總ての表象生活の心理的基礎と考えられる習慣となつてゐる、随つてこの生活の理説は、かかる單純なる「理念」から複雑なものが生じ、又最後には具體的のものから抽象的のものが生ずるのは、如何なる段階に於いてまた如何なる法則によるものであるかとの点に向つて行つた。この理論的意識の樹立は十八世紀の觀念學 (Ideologie) によつて最も精巧緻密に各段階に分類された、形而上學に破られた當時の体系は、ここに於いてそれに代わる新な活動を以て

自らを慰めていた。さて其際に先ず低級の精神複合体から高級のそれへと変化し、また単純なる意識状態が精緻のそれへと変化するのには、其自らの機械説に由るのか、または心的化学によつて完成されたのであるか（聯想心理学派の如く）、またはこの変化には更に個々の力、^{クラフト}進んでは意識の統一的本質が必要であるか否かが主な議論になつていた。生得觀念に關する長い論争は、どのみち最後には只此問題に歸した。併し此觀念学には致命的の問題であつたところの發生的問題の決定は、理論的心理学にとつては勿論多大な価値を有するのであるが、表象の成立を取扱わないで其妥当・其真理価値を取扱うべき論理学にとつては此は全然必要である。論理学が精神發生的研究に興味を有し得るのは、此研究が各種の型に於ける表象過程を其關係に由つて相互に明晰分明にすることを要求するか、又は此に適する時に限られている。併しもし觀念学者が嘗て希望し、今も尚希望するように、此事實的認識の發達の歴史を論理学自身の一部に取入れるとしても、それは少しもこの問題に接近しないことを証明するだけである。心理学（凡ての学と同様に）の論理的原理はあるが、論理学の心理学的原理はない。

心理学的先概念（Vorbegriff）を現象学的に洞觀する場合、常に論理学にとつて最も重要な点は、論理学に於いて妥当の論ぜられるのは如何なる種類の表象であるか、又此妥当の意味如何の問題である。この二箇の問題は極めて密接な關係を有していることは明らかである。併しかく云えばとてこの二つの問題がこの段階で決定されるのではなく、仮りに予め方向を定めるだけの目的で論ぜられるのである。いうまでもなく素朴的意識は、総ゆる種類及び起原を有する表象（若くは「^{イデーエン}觀念」）に対して、表象された内容が表

i 底本では「力進」にルビ「クラフト」Kraftが附いているが、それでは意味が通らない。分けて「ⁱ」を挿入。

象能力から独立に実在しているとの意味で真理を要求するか、若くは先ず叡知の裡における存在を有せるものに、更に其を超えて実在に於ける存在が附加わたるとの意味で、真理を要求するかにきまつている。この感官知覚に於けるかかる解釈は素朴的世界形象と關係して生じたのであるが、吾々は概念や判断についても亦これと同じことを考える。余は表象と実在との一致と定義されて來た真理概念を超越的真理概念と呼び、其考の根柢となつている見解を模写アッツヒルデテオリ説という、この見解に従えば、認識作用は世界を其があるがままに表象することを問題としてゐる、吾々は勿論表象が單純たると複雑たると、將た原始的たると人為的たるとを問はず、この要求を自由に総てに通用し得るのである。かかる真理概念の適用が、しかし不可避的に下の如き困難に陥るのは賭易き道理である、即ち一致か否かを検するには、事實上表象が常に表象と比較されうるのみで、決して想像上の「対象」に比較されることは出来ない、この比較には更に諸の真理の事タートゼイツヒリツヒライト実性【Tatsächlichkeit】例えば算数学的命題の如きが附加されねばならない、この事実に於いては、或内容と或実在との一致が如何なる意味を有すべきかが、人為的には説明されないからである。そこで第一の真理概念の外に更に第二の真理概念即ち内在的真理概念がある、そこでこの真理は最早個々の表象に關係するものではなく、種々の表象の間の關係に關係するものであることは自ら明らかである。またここでは表象内容と素朴的世界観での所謂対象との關係が、背景に於いて多少明らかになつてはいるが、如何なる程度まで關係を有しているかは、まだここでは研究さるべきではない。寧ろここで意味のあることは、これに由つて種々の表象の種類のなかから、再び表象との關係を有するもの即ち判断【底本では圈点なし】が、論理的興味の前景に浮び出でることである。

しかし判断の心理学は、已に古代に於いて判断を含める思惟作用デシク・アクトの外に、尚他の要素即ちスティック派【ストア派】が *συγκατάθεσις* (Zustimmung 一致) と表したものを発見していた、それは判断内容の肯定或は否定であり、受容或は拒絶であり、是認或は否認である。この要素は再びデカルトによつて一時認められたのであるが、其後は近世の論理学及び心理学に至つて始めてその完全明白な価値を得るに至つた、今日でも尚その術語は勿論其内容に關しても統一的な一義的決定を得てはいない。判断が精神的活動として觀察されるならば、それには明らかに理論的と実践的と呼ぶべき二つの要素が同じように含まれている、即ちそれは思考された内容と、この内容の真理価値への参与とである。この場合心理学的の意味に於いては、第二の意味が本質的である、それ故にこの要素は判断を表象殊に思惟の其以外の種類より、種類の異なるものとして區別するものである。其に反して論理的觀察は表象内容の内容的妥当を主として、經驗的主觀の側からの事實的是認を重んじないのであるから、アリストテレスが試みた通りに判断を本質的に理論的意義によつて規定し、扱てその次に一致とか拒否とかを附屬的の規定として取扱うようになって来る。しかし純粹（若くは規範的）論理学でも——真偽の区別の根本的事実のために——肯定及否定を判断の本質から峻別し得ない点に尚大なる困難が存している。これによつて決定的意義——判断の「性質」が凡て論理学者の主要なる態度に対して有するところの——は起つて来る、それによつて否定の論が近世の論理学上の文献に於いて、頗る重要な役割を演ずる理由が理解される。

しかし「一致」の要素は心理發生的研究の外に、更に頗る興味ある方面を提供している、即ち其要素が理

i 「容」の字が底本では「客」とも見得る。

論的思惟作用と相違する点に於いて、一部分感情的なものとして表れ、一部分意志の附随せる作用として表れる、一致の要素はかかるものとして心理学的原理に従つて種々の方法に由つてその特徴を明らかにされ其根源を説明されるであろう。同意の感情を其自らの内に有する表象内容の特性は明証 (Evidenz) としつゝ、またこの感情自身の意義を微に軽減して信念として、確實の感情として、妥当感情として妥当意識などとして言い表される。此感情こそは「真なる」表象をして他の表象に優つて是認されるに至らしめ、「妥当するもの」として主張されるに至らしめる当のものである。是認と妥当とはその場合超越的真理或は内在的真理の附属の意味を有ちうるが、併しまたこれらの意味から独立でもあり得る、且つその際には直接の思惟必然性より以上のことを意味しはしない。吾々はこの最後に挙げた真理概念を形式的という、何となれば其概念は其自身毫も対象に対する関係を有していないからである。しかし妥当感情が事実に表れて来るのは如何なる場合にまた如何なる法則によるのであるかをきめるのが、心理学にとつては更に広い興味深き問題である。思考【Meinens】と信【Glaubens】とは、認識と知と同じ様に、この研究の範囲に属することとなる、然りる。思考【Meinens】と信【Glaubens】とは、認識と知と同じ様に、この研究の範囲に属することとなる、然りる。思考【Meinens】と信【Glaubens】とは、認識と知と同じ様に、この研究の範囲に属することとなる、然りる。心理学の任務は、其任務上認識や知の純粹理論的の真と思うことを、思考や信のそれらから区別しているところの徴表を確立しようとするのである。ダビッド・ヒュームは其「論集」に於いて、表象過程の分析を模範的と思われるように精緻に成し遂げている、この表象過程を通して信【belief】は、聯想作用によつて一の表象より他の表象に移り行くことが出来る、ヒュームはかく分析を試みたにも係らず、彼の研究が純粹な心理学的原理に依つていたがために、觀念聯合の各種類の間に論理的妥当の相違を確立することは出来なかつた。

更に進んで判断の中に含まれている「是認」が、意志の附随せる行動として心理学的に論ぜられるならば、先ず心情生活Gemütsleben【Gemütslebens】の目的論的關係に於ける「是認」の位置即ち「是認」の目的及び動機が問題とされねばならない。表象を真或は偽と評価すること【Beurteilung】——それは同意或は不同意を示す——は只有意的の思惟或は無意的の思惟を評価する思惟に對して成立する、そして真理は評価の意識に對して、一の価値であることを仮定している。さて真理は心理發生的に見れば人間に對する最初からの価値ではなく、總ての他の文化価値と同じく雑多の媒介によつて真理となつたもので、且つ一般に先ず他人への伝搬の法則に従つて慣用的の手段から自己目的に移り行つたものである。勿論真理がかかる価値を有するのは学の範圍に於いてのみ、そしてまた極めて少数の一部研究的な人に於いてのみである、其外の大多数の人に對しては真理は常に自己目的でなく、總ゆる其他の目的を成就する總ての手段に過ぎない。若しこの真理・価値の・發達の・歴史を類に於けるが如く個体において研究するならば、真理はまた常に人間に利用され行動に使用されるから、常に人間に愛せられるということが解る、また人間が真理を求める方向や範圍は、常に其人の要求が單純か或は複雑か、または低いか或は高いかによつて規定されるということが理解されるならば、吾々は次のことを理解する、即ち此の心理發生的及び最後の生物學的觀察に於いて真と思われる總ての種類は同様に実践的生活様式となり、感覺的のものを原動的過程に変ずるあらゆる手段となる、またそれと共に認識及び知識の作用が思考や信に内容上優れていると云う考えが漸次衰えることを知る。それで只妥当感情の強さと実行能力とが主要になつて来る、それで古も今も同じ様に心理主義を最も極端まで徹底さして見れば、その結果はこうである、真理の理論的概念規定は一義的には得られなかったが、それは表象の能力とその結果とに

歸せしめたことであつた。これは論理学の現象学的前室の片隅であつて、実用主義は如何に弁明をしようともこの片隅に在るものである。

吾々は真理価値の發達の研究については已に、個人的心的生活の範圍を超えて、論理学の社会心理学的仮定に達する。何となれば認識することと知ることとは、經驗的作用としては全く社会的性質のものである。これらは共同の心的生活の要素の積聚したものである——個人の個々の真理への努力は後に至つて文化の成果となる、この文化の成果は常に共通の歴史的知識に根を下して、再び合一するに至るのである——其故に是認の普遍性即ち妥当性も直観概念の徴表中に含まれている。勿論それは事実上の妥当性ではあり得ない、何となれば事実上の妥当性は非常に密接な社会結合に於いても殆ど達せられないことである、よし達せられるとしてもそれは真理を保証し得ないからである。とは云え總て真理の主張に含まれている普遍妥当性の要求は、其が多数の判断主観と關係するによつて、社会的關係に由つて規定されて出て來たものである、其故にそれはまた、形式的真理概念に於いて最初に考えられたる内容的必然性の經驗的表現である。

認識作用の社会的性質は、その表現を共同生活の本質的伝搬機としての言語に見出していることに徴しても明らかにする。考えることと話すこととの關係は、其故に知識の現象学に於いては重要な対象となつてゐる、而して結局論理学は心理学や生物学や言語学が之に關して教えるところのものに、無頓着ではあり得ない。認識や知識は凡て先づ言語に表されて我々に与えられる、其故に論理の本質であるところの内的過程が如何なる範圍や方法に於いて、かの外的形式に於いて十全に表され得るかが問題である。さて勿論經驗的に考へて見れば思惟である限りは少しも話すように衝動を与えないような思惟は少くともあり得ない、それで

意識の過程にして一般表象若くは概念及類概念の中に活動せるものが凡て、言語の助けを籍らずして經驗的に表れると仮定しようとしても、それは何等理由を發見することは出来ない。其故に各人は事實上言語の裡で成長しつつ思惟する習慣になつてゐる。しかし思惟は其故に現實の作用としては、談話ということに關係してゐるとはいえ、全然談話に結び付いてゐるものでもなければ、また内容が全然同一であるというのでもない。失語症の如き病的状態のみでなくとも、通常の意識運動が、表象若くは情緒の状態の言語的表現を求めても得られないような思想や想像の範圍にまでも拡がつて行くことの出来るのは、意識内容が談話と全く關係のないものであることを証明している（同様にまた言語は他方に於いて意識中にその言語に相應せる表象運動を有つていなくとも、器械的に連続し得るのである。）また談話は内容上でも常に思惟と異なつたものである。従来往々にして見逃がされていたところのこの關係を明らかにしようとするれば、ただ言語の表現の多樣ということに注目すればよい。種々多様に話し得るということが有してゐる弁証的価値はかようである。同一の表象内容を種々に云い表す可能性が常に體驗されて、その結果内容は常に言葉の中に必然的に自明的に与えられてゐると解する素朴の見解が消え失せることである。しかし茲で特に確定しておかねばならないのは、言語上の關係形式は全然表象運動と表象結合の諸形式との模造ではなくて、其自身全く異なつたもの、即ち只其等の符号であるということである。そこで言語上の諸關係が驚くべき可能性と調節能力とを有してゐるのは、この象徴的の性質に由るのである。それに關係してまた、思惟形式と言語形式との關係は決して一義的のものではなく、却つて言葉に同音異義と同異語の關係が存する如く、亦この思惟形式と言語形式の關係に於いても、同一の言語形式に種々なる思惟形式が代用せられ、或は反対に同一の思惟形式に、

種々なる言語形式が代用されるのである。しかもそれが不思議なる言語生活の神秘であつて、この流動的な不定性は其他にも言語の美的刺戟を生ずるに大なる效があるもの、しかもそれに由つて一般に相互の理解を少しも損じないのである。最後に、その凡ての興味を以て全体の精神的共同を生々と表現するに至らしめる言語にとつては、認識の目的は只その言葉の形式構成に協同せる多数の動機中の一にすぎない、しかし言語の自然的発達の跡を見ると、それは故意的認識過程の表現よりも、より多く不随的表象運動の表現である、而して批評的思惟の訓練が先ず始めて一部分文化的言語の形成の跡を示している。総てこれらの考察の後に、知識の現象学は思惟することと認識することの言語的現象に如何なる価値を認めたかが決定されて来る。論理の基本複合体即ち判断は文章にその言語的現象を有している。且つ歴史的には、初期の種々の論理上の説が文章の分析にまた文章の成分其形式及び種類の研究に従つていたことが理解される。希臘におけるソフィステンが論理研究を始めるに至つたのはこれに基づいている、それでアリストテレスにも、また尚多くのストイケルにも、まだその余韻が残つている、かくして論理学は一部分文法と合し一部分修辭学と合することが、主にラミスムスに於いて新にせられたのは周知の事実である、しかし其後に至つても亦これは其処此処に表れている。之に対して已に述べた理由によつて次のことがいわれる、即ち論理的形式は言語的形式と關聯して意識されるのであるが、決して後者と混同されることは出来ない、否その關係は寧ろ反対で、言語的形式の純熟せる形式は、それが表象生活を取扱える限り、先ずその論理的意義から理解される。文法に論理的原理はあるが、論理学に文法的原理はない。

i Ranimism フランス・ルネッサンス期の人文・哲学者 Pierre de La Ramée(1515-72) の思想。

知識の心理的及び言語的現象形式は、表象生活——たといそれが自然に出来たものについて論じても、または故意に得た知識や認識について論じていても——の全範囲の裡に見出される。然しこの広い沢山の中から、論理的研究の狭義の対象となる歴史的形像に明らかな意義が生じて来る。何となれば吾々が学として理解している知識は、其根拠と同様に其目的を意識し、認識の方法と同様に認識の課題を意識するもので、知識自らを其俚に知る知識である。其故に日常生活に於いて経験や思惟によつて生起するような総ての知識も、論理学の妥当の範囲に属してはいる。しかし論理学は、其最も本源的任务から云えば、矢張学の哲学的理説である、この意味に於いて諸の学は、それが歴史的に得られた事実として成立する通りに、経験的基礎を提供するもので、論理学はこの基礎に基づいて自ら定位するのである。されば初めから論理学は個々の学の研究の結果に立ち入つて論ずるようなことをしてはならない（かかる試みが極めて稀れではあるがなされたことがある）。また論理学はこの態度を動搖するようなことなしに、かかる事實的知識の哲学的意義を捕捉するに全力を注ぐように任務を限定せねばならない。このことが積極的に何を意味するかは、先ず論理学其ものに於いて、一部は方法論に、一部は認識論に於いて事實に表れている。先ず現象学の最初の階段に於いて大切なことは、よく吾人が他の科学に対立して学に負わせようとするところの不当なる要求を根本的に避けることである。併し同様にまた論理学は種々の学の経験的方法を簡単に記載し、この目的に随つて科学が活動せる内容的洞察から出来るだけ抽象的に引出して準備するだけのことで満足すべきでないことは明瞭しておく必要がある。勿論総ての学に於いて已に独自の論理的考察がある、各種の機会は総ての科学に対して

i この次に「科学として」が訳として抜けている。

新に起る問題の取扱ひ方法を説明し、若くは教える所多き結果を理解するために、一の系統的形式または其れに類似のものを作らんとする要求を生ぜしめる。かくして凡ての個々の科学の中に、已に独自に作り上げられてゐると否とに係わらず、一の方法、即ち、論理学の一部が存在している、それで近世の実証主義（已にコントが明らかにした如く）はこの遞昇的【aufsteigende上昇】な方法の系列を、独得なる論理的科学に代わるものと見るような傾向を示している。しかしコントは、その際に其場合撰び出した原理の撰択や秩序がかかる個々の科学によつては得られないところの普遍的の見地に基いてゐることをば意識しなかつた。このことが明らかになるや否や、吾々は已に再び独自の論理学即ち哲学的学としての論理学の基礎の上に立つてゐる。

知識の現象学に關する概観は其故に茲では多くの爭議を惹起するに至るに相違ない、何となれば現象学の範圍に於いては只質料のみあつて、論理学の原理は少しも含まれてゐないことを示し、またそれゆゑに準備の一つ若くは他の、また多くの中に含まれてゐる論理学の取扱ひ法は総て此の学の哲學的問題には正しくないことを示すのが大切なからである。それに対して、私は最後にもう一度根本的に次のことを高調せねばならない、即ち凡てこれらの現象学的の準備、心理学的の術語の確定、妥當意識を生ぜしむる發生的過程の理解、思想と其言語的形式との間の微妙な關係の洞察、種々の科学に於ける研究結果の形式を包括的に知ること——総てこれらの準備は、論理的研究や其学説には必要欠くべからざるものである。

然しこの論理学及びその分類は、理論的意識の最も普遍的な性質から出發せねばならない。吾々はカント

と共にこの性質を綜合の原理 (das Prinzip der Synthesis) の裡に發見する。凡ての表象は、それが如何なる段階にあるうとも、少くとも一の要素の雜多性を表している、この雜多性は相互に區別されていても尚、一種の關係によつて相互に結合されて統一となつてゐる。意識は決して唯一不可分の内容ではない、しかし表象作用の不可分作用に於いて、多数の内容要素は尚一の高い——綜合的の——統一を作る、しかもこれは結合的形式によつてのみ可能である。此処に表象の内容と形式との間に根本的相違がある、吾々は其相違を恰も二者が作用に於いては相互に結付いてはいるが、分たれた心理的實在であるかの如くに解してはならない、多くの人々が考えるように、形式は持統的のもの、内容は意識内における變化するものであると考へてはいけない。却つて心的事實としては、形式であつてしかもそれによつて結合された雜多の内容の形式でないというやうなものもなければ、又内容が多肢的なもので、もはや決してこの形式によつて結合された綜合的統一とはなり得ないというが如き内容もない。抽象的の思惟のみが形式と内容とを相互に分割するものである、しかし其際抽象的思惟は形式を表象の内容 (即ち対象) としながら、形式自身を再び他の形式によつて考へることを避けることは出来ない、また抽象的思惟は内容を純粹に引き出して、其形式より區別せんと試みつつ、しかも個々の要素を更に他の關係に於いて、即ち一の他の形式に於いて考へねばならない。しかしこの抽象に於いて再び表れてくるのは、形式と内容との間に本来混合せる一の關係が支配しているということである。同一の形式が種々異なる内容に、又場合によつては同一の内容が種々に異なる形式に表れて来ることが頗る多い、それで抽象の際に於ける二者の可分離ということも実は茲に基づいてゐるのである。しかし他方に於いて如何なる形式でも總てが、あらゆる任意の多数なる内容要素に適用されるということも出来なけ

れば、また如何なる内容でも、総てが形式化の任意の種類に一致するということも出来ないのである。形式と内容との間の内面的な内容的な関係は此の点に存している、この関係（從來余り注意せられなかつた）の研究は、心理学と論理学との境界に立つものである、何となればこの関係は一義的に必然的な内容の形式化から、随意に其内容に許された形式化へ進むことの可能と、そしてまたこれの形式化がそれから（内容自身によつて）禁ぜられたものまで進むことの可能の段階の全部を含んでいる。更に詳細なる研究は——恐らく理論的意識の最も困難な問題がこの研究を要求するであろうが——此処では只最も一般的に示されるばかりである。或意味に於いて吾人が以下に略叙するように、論理的理説の行程は思维形式の分析から出発して、系統的に其が内容の関係を理解するように進む点に存しているということが出来る。

其故に先ず問題となるのは、認識や知識に於ける真理目的の実現が依属しているところの思维の形式を、抽象によつて分離し直接な明証として表すことである。吾々はこの部分の研究を、それが明らかに内容一般に關係する（それはもとより不可能であるが）のではなくとも、或る特殊の認識内容へ關係するものである限りに於いて、形式的又は純粹論理学と名づける。かくの如くして発見された形式は、形式に向けられた思维の総ての種類に妥当する、即ち前科学的にも科学的にも同様に妥当する、そしてその際吾々は特別の対象を少しも顧慮することを論じていないから、吾々が形式的真理と名づけたところの真理を取扱っているのである。

論理学の第二部門即ち方法論は初めて特殊の認識内容、随つて対象に注意を払うに至る、何となればこの部門が問題としているのは、個々の科学がその対象の形式上または内容上の性質を顧みて、認識の目的を充

すところの諸の論理的形式の間の関係を周密に説明せんとするのである。その際一々の学科は、其の意の俾になる総ての知識要素の系統的関係を、如何に種々異なる仕方によつて規定し行くことが出来るかということが明らかになつて来る、そしてこの意味で、方法論に対しては主として表象相互の一致ということに基づいて成立しているところの内在的真理が考察される。

最後に諸科学の結果から世界形象が出来て来るが、これは個人の主観的の考と確信とに反して純粹理論的に確立される、而してその客観的妥当は哲學的批評主義から疑うことは出来ないものである。哲學的拙評主義は寧ろ最後の問題即ちかの客観的世界形象が素朴的意識の仮定によつてその対象を作つたところの絶対的實在性に対して、如何なる関係を有するかの問題を提出せねばならぬ。吾々がこの問題を解くものと考えたところの認識論は、其解決に対しては他の特殊科学及び論理学の前二部門から供給された論議以外のものを有つていない。認識論はただこれから出発してのみ、人間知識が規定されない仮定として、総ての哲學以前の認識に浮び来るところの超越的真理を承認し得るか否か、もし承認しうるとせば如何なる範圍に於いて如何なる意味に於いてであるかを決定しうるのである。

i 底本では「確信とに反粹理論して純的に」となつていた。das gegenüber den subjektiven Meinungen und Ueberzeugungen der Individuen rein theoretisch begründet ist

二 純粹或は形式的論理学

純粹論理学即ち狹義に用いられた論理学は、通常は思惟形式の論と定義されている。併しかく定義するには先ず、論理学に於いては正しき思惟の形式——この形式は、心理学的に可能なる表象運動の諸形式から真理という目的によつて行われる選択を説明する——をのみ取扱うということを、附記せねばならない。論理学の教えるところは、吾人が事實上如何に考へるかではなくして、若し吾人が正しく思惟せんと欲するならば、如何に考へるべき (denken soll) かである。この通常の規定は、先ず心理学と論理学との原理上の区別を満足に云い表すに適當である、しかしまた上に述べた經驗的思惟の根本的事実の顧慮がこの点に基づいていることも見逃してはならない、この經驗的思惟は誤謬の可能性を与え、且つ思惟の結果の当か不当かの決定に面接しているからである。真又は偽の二者其一を択ぶ關係が、論理問題に参与する種類を以てしても明らかにされ得ないにもせよ、尚初めからこれらの形式の妥當は、最後に於いては經驗的意識特に人間意識の認識努力から全然独立でなければならぬことを吾々は注意せねばならない。

論理的課題の転向——これは思惟開展の普遍妥当性を以て心理学的形式と論理的形式とを區別する徴表として見る——に於いてもこのことが当てはまる、また此多數の經驗的主觀を顧慮することも、只論理的なるものの内面的内容的必然性の進出^{ほつあつ}しているものとしてのみその価値を有ちうるのである。真理の事實的理解に於いては、思惟の共通性は (ソフィステンに対してソクラテスがなせる如くに) 根本において真理の研究

に至らしめる経験的機會及び手懸りを与える役目を演じるにすぎない。このことは已に今ここで取扱う普遍妥当性が決して其自身に理解されるように事実的のものでなく、却つて要求されたものである点に徴しても明らかになっている、其故に普遍妥当性の価値は導き出されたものであつて本源的の徴表ではない、さればこの事実的の普遍妥当性が出発点となつてゐるのは、ただ現実の表象生活に於いてこの出発点をとらざるを得ないからである。

総てこれらの議論は、最後に論理的思维形式を規範として示し、形式的論理学を規範的学科として表す意味を規定するのである。この学科は其が経験的思维に關係する方面では實際に正しき思维の技術の教説として規範を立てて行く、しかしこの規範の意味その基礎付け及びその根本的妥当は、誤謬に陥りうる主観が——この主観の経験的表象は時には規範に従い時にはこれに背反する——あると否とは全く無關係である。この点から論理的法則の主要なる二様の位置が出て来る、即ち一方に於いてはこの法則は経験的意識に対しては規則となる、総て真理に向けてられた思维はこの法則に随つて完成されるであらう。他方に於いてはこの法則は、この法則に適應するか又は適應しないような事実上の表象過程があると否とは全く独立に、内面的な独自の意義と本質とを有つてゐる。最後の方を妥当其自身 (Geltung an sich) と云い、初ものを吾々に對する妥当 (Geltung für sich) と名づける、ここに吾々と呼ぶのは、人間ばかりでなく、総ての個体主観であつて、吾々と同様に表象の間に真偽若くは正否の區別を見ることが出来るものをば総て含めてゐるのである。「吾々」から出発すれば、論理的なるものは当為である。然しこの当為は其根柢を或るものに有してゐる、この或るものの妥当は其自身に成立してゐて、この妥当が誤りうる意識に關係すると一の規範即ち当為とな

る。

吾々が一般に普遍妥当なる随つて其故に正しき思惟の形式に關して、相互に一致するのを頼りにしているのは何によるかを問うに至るや否や、形式的論理学の闕に於いて直にこの二様の意味に關する顯著な例に遭遇する。即ち若し何事かが主張されるや否や理性的意識が一の規範的の衝動——そのことを主張するためにはこの衝動に由つて、亦他のことが主張されるに至るのである——を認めなかつたならば、一般の場合もそうであるが、論理的問題そのものに關しても、凡ての研究と考察凡ての証明と反証とは全く無駄である。その場合「主張する」という言葉は肯定又は否定を一般的に表す言葉として用いられる。吾々はこの真理という目的に属する思惟の最も普遍的なる要求を齊合の原理【Prinzip der Konsequenz】と名づける、この原理は、原因と共に結果が定まり、結果と共に原因が止揚せられるというが如き伝統的形式の全体を特殊化としてそれ自身に含んでいる、併し普遍性に於いて云い表されていることはこうである。論理的思惟開展の範圍において、多数の多種の原因によつて思うことや信ずることのうちに表れるところの妥当意識は、只理論的根拠によつてのみ制約されるということである。しかしながら総て認識でありまた知識となろうとする思惟におけるかかる最高の要求（齊合の原理）は、思惟内容其自身の關係——これによれば或るものが妥当するから或る他のものが妥当し其他のものは妥当しないという——があるということをただ經驗的思惟に規範的に適用した方面にすぎない。かかる妥当するものの形式的に規定された關係——それは吾々の思惟がその關係を達成しているか又は欠いているかに全く無頓着である——は、吾々が一般的思索に於いて証明され且反對されつつ是認された主張によつて他の主張を是認するに至らしめる最終の根拠である。かの客觀的意義（私はこ

の術語は文雅という上からは余り好まないが、簡潔なためにかく名づける）は一見明らかなるが如く、認識論上の根本問題を含んでいる、然るに主観的価値は先ず形式的論理学に手懸を提供する、然しこの論理学には同時に、仮定自身が証明の原理となっているから、証明され得ないような仮定を含んでいる。形式的論理学から確定さるべき凡ての正しき思维開展の規則に関する方法論的取扱いにも同様のことが当てはまる、其証明は規則が規範的意識に於いて妥当するかの明証、且一部分は規則が体系として相互に関係するところの確實及び一致という点に於いて妥当する。吾人が思维を精密に研究しようとすれば已に正しき思维の規範に従わねばならぬということを嘲笑する人があるならば、吾人はもはやその人と何事をも論弁するの必要を見ない。

論理的問題を指示してこれを方法論的に研究するのは、さほど単純ではない。此の点で現象学はその進路を指示せねばならない、これによつて規範の考察は次の原理を追隨することになる、各種の事象的表象運動に対しては、表象運動を普遍妥当的な規範的意味に於ける思维必然的として是認せしめるところの諸条件が意識されて来る。論理学と文法との原始的結合がこの点に於いて其後永い間の影響を与えた。言語の綜合的組立に於いて言語が要素として、文章が其結合せるものとして、文章の組織が文章の結合せるものとして、理解されるが如く論理学に於いても同様に概念から出發して、概念から判断へ、判断から推理に進むように考えられる。この三肢分類はスコラの論理学に於いては勿論のこと現今までも大抵の論理学に採用されている。

さていよいよ、言語的形式と論理的形式と【λόγος προποριστικός und λόγος ἐνυδατικός】を方法論的に區別しようと

する要求が起る。言語に表された原始的意識の表象と厳密に區別されるべき論理的複合体としての概念は、常にこの概念を基礎付けて行く判断の所産である。斯くして得られそして確実な表現を有している概念は、次に分析されて、其の徴表の一角が概念自身にあることを承認する様な判断を確立した。ただ斯る（カントの意味で）分析的判断は判断の根拠として概念を予想する、然るに認識が成立するところの総合的判断は其の関る限りで概念を作り之を基礎付ける。従来混合して用いられた言語の諸の表現を、其意味に随つて區別するために、吾々はこのことをかく云い表しうる、即ち総て認識することは真理を求めて流動止むなき思惟として、総合的判断に於いて成立し、この判断によつて概念を生産することである。しかし、真理を知る知識はこの概念に於いて成立する、この知識は其後更に進んで認識する際に再び流動的となり、分析的判断に於いて新たな思惟の開展に利用されるのである。その際、此処で概念と呼ばれるものが唯一の特別の言語で表現されることは絶対的に不必要というのではないが、唯だ言語使用の困難なために只技巧的に達せられうるのみである。論理的に観察すれば、概念とは認識が凝結されて知識となつたものである、吾々は判断及び認識エルケネン【Erkennen】に於いては真理を得、概念及び知識ウイッセン【Wissen】に於いては真理を保っている。しかし概念の論理的構造はそれゆえに判断のそれと異なるものではない、只真理に向けられた表象生活の種々の屯所が、通常其言語や文章として種々に言い表されるのである。そこで余が「意志は自由である」と云うときは、意志と自由との間に「意志自由ウイレンスフライハート【Willensfreiheit】」の語の場合と全然同一の關係を考えている、只判断に於いてはこの關係の真理を主張し得るのであるが、概念に於いては其真理価値に参与することなくして、只この關係の真理を考えることが出来るのみである。しかし知識を構成する概念は、認識によつて肯定されるのであ

る、其故に概念は妥当其自身の要素を保有する、しかるに補助概念はこれらの概念と異つて初めからその真理価値を決定することをしないで、屢々研究の途で作られそして利用される、かくの如き概念は先ず主に疑問的即ち仮言的である。

此論証に加えるに更に、推・理・は一種の判断の基礎付けで実に多くの判断を判断することである、このことから考えれば、論理学は判断・論に外ならないことが明らかになる。しかし認識の根本作用としての判断に於いて、其場合理解されるものは只現象学が表示する所のものである。即ち表・象・関・係・の・真・理・評・価・、総合的意識の作用である、この作用は其真理価値に於いて評価される。この二つの要素は完成せる判断には事実上常に結合されている。相互に関係せる表象内容の多数は、真にまた人称命題又は存在命題におけると同様に、判断の断片たる或る言語的形式に於いて、一見一の表象が主張の対象となつてゐる所に存するのである。吾々がこの前者では無主辞の、後者では無賓辞の命題に関して或不安を感じるのは、全く吾々が判断論を目して賓辞が主辞に関して何ごとかを云い表すものであると解して、直に命題の言語上の形式から理解する習慣になつてゐるからである。

されどこの一般の図式化は、それが簡単に一義的に見えるほどに無害であるともいえない。嘗つて或るものは科学的の説明に於いて一命題毎に「SはPなり」とか「SはPにあらざ」とかの形式にしようと試みるのであるが、直に、生ける思惟は強いて図式に嵌め込まれないことに気が付くであろう。吾々が思惟し談話し記載する命題は、頗る多く、内容の多肢的雑多性を与える、これらの内容は種々の異なる形式に於いて相

i 底本では欠けているが、原典では指示があつて(本 PDF: p.16) 以下参照とある。

互に関係していて、只賓辭の群を主辭の群の表現と見て強いて人工的に變形される。然し又形式的論理學が普通の場合として常に取扱つてゐる單純なる場合に於いても、「表現」は決して一義的ではない。この表現の意味は言語上精々繫辭によつて指示されているが、決して表現されてはいない。何となれば繫辭は、其自らの本質に随えば、變化し得られざる賓辭即ち形容詞と名詞との間に動詞的形式を置いたまでである。此処に上に述べたる言語經濟の一の主要目的が存している、何となれば多く異なつた思维形式の多數を、色彩を帶びていない同一の言語の形式が代表するからである。思维形式はこの場合其俁一般に言語には云い表されない、且つ論理的見地では「表現」は、主辭に賓辭が帰せられるのでなく、主辭にその賓辭への關係が帰せられることである。^(二)論理的に偶然、存在動詞を繫辭として使用するために生ずる誤謬に関しては、いまここでは論じない。只二表象中の孰れが先ず注意を自己に向わしめるものとして文章上の主辭となり、孰れが附加されたものとして文章上の賓辭となるかは、ここでは言語上から只多く統覺の過程によつて決せられることを記すれば十分である。内容上はAとBの間に主張さるべき關係が、またBとAの間の關係として云い表されることは出来る、勿論必要な場合にはこの關係を轉換する。それ故にこの論理的意味から云えば、凡ての判断は純粹に可逆的であるが、言語上から云えば可逆的であるとはいえない。全く關係の仕方が大切である、即ち此關係が相互的のもの、例えば同等^{グライヘハイト}【Gleichheit】の如きものであるならば言語上の可逆性に何等障礙を与えるものではない、余がAに就いてそれが2に等しいというならば、同様にまた2に就いて、それがAに等しいとはいひうる。しかるに之に反して黄金に關して、其は黃の性質を有している（其は文章の

i 底本では欠けているが、原典では指示があつて（本 PDF: p20）参照。

論理的意味で、主辞たる黄金に就いて賓辞たる黄が「云い表す」というならば、同様に余は黄に就いて、黄は黄金の性質であるとはいいうる。言語上からはしかし「黄金は黄い」を転換したものとして「黄は黄金である」というのは不当である、それは又主賓の混合でなくて、只異常な反対な文章構造として妥当するのみである。何となれば此場合論理的に云い表された関係であるところの内属、即ち物がその性質に対する関係は、結合された内容が、混同されず、また内容上同価値でもないようなかかる結合の形式に属している、其故に吾々は或意味に於いて、かかる形式に於いては自然的なる内容上制約されて統覚過程より独立な主賓の秩序に関して論じうる。内属においては、この思惟の習慣及談話の習慣強きため、アリストテレスは事物は決して文章における賓辞であり得ないと、主張することが出来た。

それゆえに吾々は、^{ひそ}窃かに言語の結合を免かれんがために、論理的に判断を或る関係の主張 (Behauptung einer Beziehung) と定義することが出来る^(三)、かくて再び、心理的分析に於いては本質的のものと表れたかの二要素がこの主張に於いて合一するであろう。カントが形式的論理学の論の構成の結果として、有名な表に於いて得たと同一の結果に、吾々は判断分類の批評に於いても到達するのである。ジクヴァルトやロツツェの研究によれば、判断の分類は其が百年以上も享受していたかの自明性を最早要求しなくなった。分量 (Quantität) の相違は判断其ものの作用に関するのではなく、只主観の相違に関するものであることが容易に明らかにされる、されば分量の認識価値は概念及び推理の論 (通常の説に従つて) に至つて初めて表れるのであるが、特に方法論に於いて観察されるのである。様相 (Modalität) にあつてはこの関係が少しく複雑になっている。カント以後様相は判断の内容を少しも増すことなく、只「思惟一般」に対する繫辞の価値に関係す

るばかりであるから、肯定或は否定の価値の規定を含んでいる性質（Quantität）とどの点で異なるかを見ることが出来ない。勿論實際に大抵の取扱いに於いては、確かに性質と様相との二様式は、相互に幾重にも關聯している。しかし様相が判断要素として稍独得のものを意味すべきであるならば、それは個人的意識が其主張に対してうる基礎付けの量や種類の等級を区別すること、または（しうる）こと können と、せねばならぬこと müssen の）言語上の多義に由つて關係（Relation）の範圍に映發（えいはつ）されたる差異に外ならない。されば茲になつて来ると結局性質と關係のみが判断論の主要なる二個の見地として存することとなるのである。この判断の性質に關する論は、本質的に肯定或は否定の規範に導いて行く、この規範は最も一般的なる原理として思惟法則の名で知られているのである、此範圍に於いては、吾々が言語的表現に基づいた二三の難点を看過すれば、アンツロポロギッシュ【anthropologische 人類学的な】な特性との關係を容易に除くことは出来るが、その代りに凡ての經驗的意識との關係は尚存している、この意識は往々誤りがあつて随つて否定を要するものである。然し上に記載せる規範の二重性より起り来る最後の問題は、主に次のように表されるのである、即ち客觀的妥当の其自身純粹な積極的な規定が、如何にして肯定と否定との關係に対して規範となるのであるかと。

何となれば先ず否定が、探究せられた肯定の拒絶以外に、更に他の意味するところのものを知らないようである。正当ではあるが目的も意味も有たない否定判断の数が任意に無限に増加されること、また誤つて肯定されると幾らか危険であるようなもののみ、吾々は合理的に否定し得ることは事實である。其は実に近世の論理学に於いて正しく起つて来た、しかしそれとともに純粹な主觀的で誤りうる主觀に限局された否定の

性質が、証明されたか否かを問題とするのである。寧ろ余が此問題を深く論じて行くに随い、総ての上の論議【Argument】は経験的意識における否定の機会及び事実上の経過に於いては肯繫を得たものであるが、それにも係わらず普遍的な場合並びに特殊な場合に於いては正しき否定には、これに対応する論理的根拠の存在せねばならないことが、余には愈々益々明瞭となつて来るのである。総ての否定判断が意味する不一致性、または判断要素を上との関係に持ち来たさんとする試みの失敗は、孰れにしてもこの判断の要素自身に存している。ここに於いてかの意義の形式とその内容との独特なる関係は——この関係によつて形式と内容とは、相互に或限定された程度に於いて自由なる活動性を有するのであるが——最高のそして余の見る限りでは其以上明らかにはし得ないが、しかし与えられたものとして肯定及び否定の論理的明証に附加される条件として働く。そしてその意味は、最後に否定に於いても尚内容的妥当の要義が含まれておらねばならぬことである、この要素は誤りうる意識の運動から独立であらねばならない。

規範的論理学に於いては肯定と否定との関係が矛盾の原理によつて云い表される、この原理は肯定さるべきものを否定すること、または否定さるべきものを肯定することを、禁止する意味である。人々は禁止を必要だと考えた、というのは同一内容の肯定と否定とは欲望と嫌悪の場合と同様に、自然の法則で、互に相容れないものだからである。しかし他方に於いて吾々が誤つて肯定したものを後に至つて否定したり、または其逆をすることを禁じ得ない。茲にも亦矛盾の離接はこれによつて心理的表象運動に対してなす禁止を基礎付ける為に、其自身論理的に妥当せねばならないことが明らかである。此に対して肯定の心理動機は否定

i 底本に欠けているが原典では p.15f (本 PDF, p24) 以下参照である。

の動機の外に成立しうるのであるが、決定の論理的根拠が二方面の中の一によつてのみ限定されることは事實である、各人が一氣呵成に同一内容に、肯定と否定とを主張することが實際土頗る稀に起つて来るのであつても、矛盾の禁止という価値に充ちたる意義は、齊合の原理と結合する点に存する、この原理によれば或主張からは、其自身、若くは他から承認された主張に矛盾するようなものは何にも起つて来ないというのである。特に此關係は証明や論駁の教説の際において發達する。かかる關係は已にアリストテレスに於いて充された要求即ち矛盾の原理にもまた客觀的形式化を与えんとする要求を基礎付けている。矛盾の原理が通常の形式に於いて「甲は非甲でない」とか、又は他の形で「同一のものが存在してまた同時に存在しないことは不可能である」と表される習慣になつていれば、それは形而上學的原理であるか、または認識論的公準であつて、その中では現實が矛盾を其自身に容れないと考えられているのである。尚其以上に進んだ範圍を有するこの命題の是正は、形式論理學のよくする所ではない。これに対しては、術語を新にして矛盾の原理に無關係なる形式を与えることを勧める、即ち同一關係の肯定及び否定は同時に二つともに妥当することは出来ないとするがよい。

しかし矛盾的離接はそれによつて先ず半分だけ分析された、其の他の半面は、肯定と否定とが二つとも誤りであることは出来ないから、その中の一者が妥当せねばならないということである。そのことは拒中の原理【排中律】によつて云い表されている、この原理の妥当は、外見的即ち純粹言語的例外によつて動かされるものではない。此處で独特なことはこうである、拒中の原理は只客觀的妥当に於いてのみ云い表されるが、此に反して規範はこの原理からは導き出されないのである。総て随意に考えられた關係を無制限に、且つ除

外例なしに肯定し或は否定せんとする背理の要求は、寧ろ經驗的意識の立場に於いては全く拒絶されねばならぬ。^(四) 認識の進む途に於いては、肯定も否定も立証されないような場合や、または論理的良心に対しては二者ともに禁ぜられているような場合が、可成屢々生じて来る。そこで茲に、かの所謂第三の思惟法則即ち充足理由の原理が表れて来る、この原理は、言表された規範として、総ての主張が普遍妥当の根拠を有たねばならないという論理的要求を含んでいる、それ故にこの原理は、思考や信仰の個人的妥当感情を得させるところの多くの心理的原因に対して表れる。しかしここで再び強調せねばならないことは、理由の普遍妥当性が其場合分量的原理でなく、却つて内容的思惟必然性を意味することである。とはいえ、その故を以てこの命題も亦禁止の性質を得るのである。即ち吾々は何等十分なる理由が存在しない時には、主張することも肯定することも否定することも出来ない、そこでこの禁止は再び古の懷疑家並びにデカルトの試みた如くに主張の中止の命令、或は蓋然的態度の命令といわれる。

茲に於いてか思惟の法則によつて規定されたる判断の二要素間の種々の関係の形象が次の様に表れて来た。先ず最初には種々の表象の間における関係が全く無関心にただ考えられている。此関係が一旦真理価値に關係されて来ると、我々は疑問の言語的並びに思惟的形式を得る。疑問を決定するというのは、其によつて疑問が肯定されるか否定されるかの主張であるか、然らずんばこれによつて疑問の（二時的或は永久の）不決定性が主張されるところの蓋然的態度であるかである。この関係の理論的思惟は凡てこの五段階に於いて全然同一である、而してそは言語、言語の結合即文章として言語上の形式に於いては、常に同一の論理的内容を現しうるのである。現にしかし四種の参与^{ステルイグナーメ}【Stellungnahme 見解】の中孰れが「判断」として是認さる

べきかは、余にとつては術語の問題のように思える。一方では疑問を判断の準備と見て、それで判断性質の種類としてすら妥当させようとする人々がある、併し他方ではまた完成せる判断には決定を含んでいとの理由を以て、疑問をかく解することを許さない人々がある、されば肯定と否定の外に第三の性質の種類として蓋然的態度を認めようとする私の提議もまた、同様の議論で攻撃されるのである。それにもかかわらず、私が提案を固守しようとするれば、それは主として上に發達させて来た批評的無関心が、充足理由の原理に対する關係によるのである。この後の方のものが本質的に規範として經驗的な、そして結局不十分なる意識に向けられることは、次のことによつて示されている、即ち我々の現実の思惟は種々にこの原理を害せねばならない、何となれば肯定或は否定に充足せる理由が存しない処では思惟は、不充足なる理由による主張として定義さるべき蓋然性を以て満足せねばならぬからである。その理説はしかし其故に方法論に属している、この方法論は、生活と同様に科学がまた論理上要求せられた択一的の疑問解決の中止をなし得ないのは何故であるかを明らかにせねばならない。

他の二個の思惟法則には比較的客易に客觀的形式が与えられたのであるが、それと同じ様に充足理由の原理にも容易に客觀的形式を与えようとすれば、大なる困難があることを最後にここで考えねばならない。何となれば従来の本体論が屢々試みた如くに論理的原理を因果原理へと變化することが恐るべき危険な誤謬であることは、已に久しく世間に知られていることで、今更此の証明を再び繰り返す必要はないと思われる。寧ろ最も適切にこれに代るものは恐らく齊合の原理である。吾々が併し再び妥当の中心範圍に於いてこれによつて吾々を救おうとするならば、已に試みたように其自身に成立するものとして主張の思惟に対した規範

となるが如き理由と帰結との徹底的關係を論ずることは出来るだろう、然しこの原理を定義して総て妥当するものは、妥当の根拠をそれ自身に有つておらねばならないとするのは危険である。何となれば吾々はこの見解によると、根拠はそが基礎付くべき妥当するものとは異つた他の根拠を考えねばならないようになるだろう。しかしそれは人も知つてゐる如く無限の背進を其自身に伴つてゐるから許しがたいのである。寧ろ充足理由の原理を徹底させるには、若干の其自身妥当するものは其自身の中に妥当の充足理由を有し、それをして他の妥当を確立することを仮定せねばならない。經驗的の意識にあつては、この關係が直接・確實・性と間・接・確實・性と著しい區別となつて表れる。ただ二者の關係が一致しないことや、寧ろ現實認識の活動の内に其自身妥当する根拠より全然出立しないところの充足的基礎付けが表れることが、已にアリストテレスの論理學の価値ある所産である。

判断の關係こそは範疇論の対象である。範疇論は論理的理説の頂点を形づくるものである。即ちそれはカント以来最大なる中心的主要問題であつて、これに關する一般の承認を得た解決は今尚得られていない。カントが古い「判断の表」に於いて見出したと信じていた途が破壊されて以来、却つて此と反對に一の原理を發見し、この原理によつて範疇の体系並びに同時に判断の体系を導き出すに至つた。しかし已に余が、ジクヴァルトの紀念論文集（チュービンゲン一九〇〇年）に於いて論じた如く、この原理は余には齊合の原理としか思われない、この齊合は已に述べたように一般に意識の最も普遍的な本質を作り、同時にその下に於いてのみ關係的思惟が可能なるが如き最高の条件を表すものである。この条件を考察することに由つて

i Philosophische Abhandlungen : Christoph Sigwart zu seinem siebenzigsten Geburtstag 28. März 1900

のみ関係の最高の形式即ち根本範疇が発見されるに至るのである。この範疇はかくしてそれから特殊の関係を決定することが出来る。この範疇体系の発達に於ける発展の原理は、已に得られたる要素が更に進んで互に関係し結合される点に存している。されば体系的発展は更に何等外部から取り入れた規定を要しないで、しかも種々の段階に於いて経験的によく知られた関係形式を生ぜしめうるのである。

然し関係の全体系が種々の系列に分たれ、その系列の間に或る対応の存することは初めから明らかである。種々の論理的の說に於いて関係或は範疇として取扱われるものを單に蒐集しようと欲する人は、恰もカントが三分肢分類の開展を自らの内に有している四分法を眼中に於いて試みたと同じく、内容的の組織原理の要求を承認するであろう。かかる内容的組織は、形而上学的原理或は認識論的原理が範疇的論理学に這入つて来た処に容易に認識範圍又は対象範圍の分類と見られた。さればプロチン【プロティノス、205-270】はアリストテレスの範疇の外に叡知的範疇を立てた。ヘーゲルは理念の自己發展を自然的の、及び精神的の、経験世界の弁証的關係並びに内容的根本規定に分つた。それからエー・フォン・ハルトマンは大なる精力を発輝して、主觀的理想と客觀的實在と形而上的なものとの三分された範圍によつて、範疇の平行論を徹底せしめた、そして、最近にはラスクが（哲学の論理学及び範疇論【久保虎賀寿訳あり】）特殊な系列の發展に立ち入ることなしに、範疇体系を更に他の三様性によつて分たんとする最も意義ある計画を提議した、其体系を彼は妥当、存在、超存在の範圍に分たんとした。茲で諸系列の相合する構造が如何なる範圍まで成し遂げらるべきか、または成し遂げられうるかは、尚十分確實には予知することが出来ない。

かかる平行的構立の要求に対して、余は反省的範疇と構成的範疇（reflexiven und konstitutiven Kategorie）

とを区別しようとする提議で十分であると思う。この区別を立てる原理は意識が対象に対する関係の相違に随つて認識の根本的要素に存している、この要素に於いては真理価値の意味は、それが一般的に対象に關係せしめられる限りに於いて、決定されるのである。それ故に吾々は、種々の対象の間の現實關係として考えられる範疇をば、構成的或は対象的 (gegenständlich) と名づけ、それに対して対象の特性によつて規定されるのであるが尚關係としては意識の裡に初めて表れ、而も意識に対してのみ存在する範疇を反省的・的・と名づける。この意味に於いて、二種の範疇は超越的真理概念と内在的真理概念とに分れる、それを以て構成的範疇は存在し反省的範疇は妥当・する・といふるかもしれない。而して範疇体系の最後の問題はかく分たれた二系列を再び合一し、二個の根本範疇即ち妥当・と存在・とが相互に結合されて統一となるが如きかの思惟形式を見出すにある。

反省の範疇は、判断の最初の而も其他の總てのものの根柢となる作用としての区別・を以て始まる、其理由は種々の表象内容を相互に其他の或形式に關係させようとするには、先ず始めに表象内容を相互に区別し、其区別を保たねばならない。区別することを否定の命題に依て言い表そうとする言語上の習慣が、かかる命題の論理的意義を思い誤らしてはならない。意識の要素は各總て他の要素より区別され、且つ之に対して其特異性を維持しようという根原的自明性は、自同律の原理として言い表されはするが、而も自同律の原理なる術語をば、吾々が対象的形式中最も顯著なる位置にある範疇に取つておく方がよい^(五)。其以上の凡ての範疇的思惟に對するこの假定は、規範として一般的表象に於ける語義の一義性と個々の表象における意識内容の確立とを意味している。

区別の極限の場合は、相等性 (Gleichheit) となる、其際同一と考えられた内容は自明的に或る点で更に区別される、そして種々に段階ある区別と同等との結合から (それはまた言語的にも類似若くは不類似と表すことが出来る)、更に詳細なる反省の範疇は二系列に分れる、吾々はこれを数学的・分析的 (mathematische und diskursive) と名づける。此のうち数学的の系列に表れるのは、自同として区別された要素である所の多様を綜合する根本形式であつて、それは即ち数えること (das Zählen) である。これから次に更に詳細なる数もしくは分量の範疇は全体が其部分に対する根本關係によつて發展し、量 (Größe) の關係は更に分量 (Maße) と度 (Grade) との種々の規定を以て發展した。かく数学的系列のこれまでの議論、及び更に深く進めて議論して行つても如何なる範圍まで時間空間の直觀的關係が觀察さるべきかを、余は茲でこれ以上詳細に論究しようとは思わない、しかしながら、時空の直觀的關係は反省的系列内に於いては決して論理的原理でなく、この原理の応用の範圍を示しているものである、即ち算えるという根本作用が心理的作用として時間を予想しているのは、其他の總ての多様なものの綜合という意味とその程度とに外ならない。總てこれらの範疇を区別と相等との關係に還元することは、結局凡て数学的理解は相等判断として言い表され、相等の (区別と同じく) 關係は絶対的に相反的であるとの点に表れている。方程式の各項が転換されうること、其相互を置き換えうる可能性、随つてまた總て数論の論理的根本基礎はこの点に基づいている。

分析的系列に於いては区別並びに比較から概念關係が發達して来る、而して茲では通常の概念に關係する説が判断論に於いてその正しい位置を得ている。何となれば論理的思惟の第一の労作は、體驗を変じて概念となすことである。さればこれは體驗された雑多性を其要素に分ち其結合の形式を個々に意識する、即ちこ

れは区別する分析と再建的综合とによって行われるのである。前に直観に於いて完成されたものが、概念に於いて明晰に意識されるならば、(二)でも想起【*éveil*】¹⁾についてのみ論ずることが出来るほどに)これに關聯して主に二つのことが著しく見える、その一は、分析の不完全を避け得ないために綜合の選択的自発性が必要となり、随つて已に茲に論理的意識そのものの所産として、一層他の思想上の労作の「対象」が表れて来る。その二はこの第一の概念は第一次の表象の内容及び形式となつてくるが、しかしまた選択に由つて減ぜられた内容にあつてもまた、意識された形象に高められる形式にあつても、有意義にこれから區別されるのである。もとは原始的の表象を表している同一の言語が、概念を表すに用いられるような場合に多く起つて来る難点や誤解は、ここに萌している、そして表象から作り上げられた概念を、独特の名を用いて表すべき科学の權利、否一部分その義務も、またこの点に基づいている。

更に區別と相等の交互作用は、概念に於いて發達する。凡て個々の概念はその徴表の總和である計りでなく、徴表間の一定の秩序と關係とを有している、此点で徴表の相依性(大抵構成的範疇によつて)が考えられ特に主張せられる。この二者はかく關係を有することによつて、比較の可能を共に与える、比較は異なる徴表を抽象と、同一の徴表の反省とを以て類概念を作るに至る、この類概念は其後再び同様に維持されて、それと同音異義なる不隨意的表象過程の一般普遍表象と混同されないようにせねばならない。尚概念の等級は抽象の過程を進めることによつて、且つ限定におけるその换位によつて(この理説では、不規定なる一

i 底本では「過」が消えているが原典では *Abstraktionsprozesses* である。
i i 「换位」定言的判断の変形による直接推理の一つ。

般徴表に関するロッツエの説が初めて、満足な基礎を与えた）出来た、この等級は概念の下位と同位との関係、分離と離接との関係を含んでいる。下位判断は、これらの概念関係の範疇が云い表されている判断（多く分析的の）から、最高の危険な意義を得たが、それは論理学が（已にアリストテレス以来）、論理学に於いて考えられた所の傾向、即ち主辞を賓辞の範囲に排列することを以て総ての判断の類型と考え、下位又は包摂作用を繫辞の徹底の意味と考える傾向を有っているからである。これはスコラの論理学の著しい根本的誤謬である。「黄金は金属である」は、勿論正しい下位である、しかし「黄金は黄色である」が生々とした思惟において意味するものは、黄金が黄色の下に包括されるだろうということではない、かかることは明らかに無意味なことである、決して黄金が黄色な物体の下に算入せられるというのではなくて、黄金は黄色という性質を有っているということである。吾々はその際に包摂作用を考えるのであるが、それは判断本来の意味ではない。しかし賓辞作用もまたそれではない、それからアリストテレスのなした如き概念の内容から出発する洞察的の転向——これによれば賓辞は主辞の徴表として云い表される——も多くの場合当てはまらない。「黄金は事情によつては自然のうちに純粹のままで見出される」の如き命題は、両者の図式中その孰れにも属してはいない。

かかる主張の上に築かれた推論式論に対して主なる位置を得ようとするには、この関係の考察が必要である、吾々は自己の立場から推論式論の問題は或概念を他の概念に対して妥当せしめる形式を規定する点にあると思う。吾々は限定、分離及び離接に於いても類概念が思惟においてその論理的範囲の部分総て（即ちこの概念の下にある種及び単純概念）に対して有する限定的意義を有たなければ不十分である。しかし尚一層

普遍的に次のことが表れて来る。類概念そのものに妥当する総ての規定が、その経験的範囲内の各部分に對しても亦妥当することである。概念は総てその類例を「想定し」、これを「代表し」、かくてその全範囲は概念自身を代用し得る。されば特殊が普遍に依属する論理上の根本關係は言語上次のように言い表されている、即ち総ての概念判断は一般的即ち定言的命題の形式を取らねばならない、即ち「甲は乙である」、——「総て甲は乙である」——「総て甲は乙であらねばならぬ」と、この場合遍有遍無則 (Dictum de omni et nullo) に對して、一般判断の否定の多義より生じ来る困難を、更に立ち入つて論ずることはここでは避けねばならない。

推理の理説は、アリストテレス以来用いられた如く、かくの如き言語的形式からのみ理解されるのである。推理論は、概念の内容と範囲の間に行われる相等 (Gleichheit) と相異 (Verschiedenheit) の關係だけに限られている、それゆえ推理論は全く判断におけるこの種の反省的關係のみを見て構成的範疇には全然無頓着で一顧だも与えていない。アリストテレスは推論式論を發達させることは出来たが、かくも完全無欠に成し遂げ得たのは、実に反省的關係に範圍を限つたからである、この体系を今茲では詳論するには及ばない。ここで直に目につくことは、「四つの推論式の格の誤れる狡猾」、及び式は総てその本質上言語的動機に還元しうることである。他の三格を第一格即ち、特殊が普遍に従属していることを最も純粹に表している兼撰對当の推理に還元して見れば、直に而も十分にそれが言語上の動機に基づいていることが明白となる。所謂對

i 三段論法をもたらず基本原理「全体に就いて真なることは一部および個々のものに就いても真ならず」

i i Subalternation のことで直接推理の對當關係のうち、「大小關係」

當關係に基づく直接推理も、吾人が推理における否定關係を齊合の原理と正當に關係せしめるや否や、兼攝對當の推理の下に屬することになる。これは尚詳論を必要とするのであるが、ここでは余白がないから省略する。

推理論を概念の内容及び範圍の相等關係に制限したために起つた最後の而も或る意味で正當な結果は、最近の時代まで幾度も起つて來た論理的計算の試みの裡に窺われる。一見明らかなるが如く、よく古代に好んで用いられたかの円又は角によつて表される推理の図式と共に、また繫辭は或る方法で主辭と賓辭とを同一となすものであるという誤れる見解の結果によつて、吾々は再び判斷を方程式に書いて、推理においては數學的方程式と同様に此判斷を計算するような思想に還つて來る。判斷の「分量」の中に已に段階的な主辭の質量の規定が存する以上數學的に記しうる唯一の道は、賓辭の分量化によるのみである、これは実に主賓兩方の範圍の間の方程式を作り、その範圍を算定させるのである。しかし上のことから、推理作用が限定された關係の區域は如何に狭少なものであるかは明らかに、生ける思维の現實的推理のうちで、この推理説はただ數學的推理に自然に適している、ここでまた次のような結論に達する、數學的論理的原理はあるが、論理學の數學的原理はない。――

構成的範疇の範圍は、カントが形式的論理學と區別して先驗的論理學に要求した思维形式、即ち對象的關係の範圍と一致している、さればかくの如き對象性が吾々の現實的認識生活にとつては經驗への關係並びにこの經驗への制限に於いて表れるのは、カントの力強い創造の產物である。またカントの意見によれば、彼の（對象的なる）「範疇」其自身は、矛盾の原理の下に理解される「分析的」形式と同様に、總ての思维一

般に對して妥当する、そこでこれらの範疇の先験的論理の意味は最後の例に於いては、總ての直觀其故にまた吾々の直觀の条件からも独立であるべきである。がこれらの範疇は、いまここに真先きに取扱わるべき對象性を、時間的形式並びに一部分全く空間的形式における範疇の圖式化に負うている。これが先験的論理学に於いて圖式論 (schematismus) の有する中心の意義である。その理由は (カントの説によれば) 時間及び空間の感覺的圖式に沈潜することが對象的關係に於いては真の本質的であつて、この沈潜が直に、これら範疇の系列に於いて特徴あるもの即ち種類を分つ徴表と見られるのである。吾々がこの徴表を除き去ろうとすれば、ただ一の形式論理的關係、一の反省的範疇が残るのみである、存在の範疇の代りに妥当の範疇が表れて来る^(六)。此關係は因果性において最も能く知られているしまた最も明らかである、吾々が因果性から時間的性質を取り除けば、ただ一般的なる從屬形式又は限定の形式が残るのみである、これらの根本形式は特殊が普遍に依属すること即ちスピノザの無時間的因果性である。

次に余が範疇系列の間の重要な關係と考えるのは下のことである、即ち反省的關係 (相等と相異) が對象の裡にあるものと考えられていながら、時間的秩序並びに一部分空間的秩序より成る特性によつて色付けられている点である。されば時間及び空間は論理学においては反省的範疇から構成的範疇を作る位置を占めている。この場合、「直觀的」形式を批評的「論理的」形式から區別せんとする際に、心理学的偏見のために起つて来る種々の謬見に對して特に指示せねばならないのは、構成的範疇は其自らにおいて統一的形式關係 (Formbeziehung) であつて、「直觀的なもの」と「論理的なもの」とは、この形式にあつては全く抽象においてのみ分離されうる二方面なることである。吾々の経験を構成している知覺は總て感覺性質の統一

された雑多である、しかしこの秩序は決して単なる時間的空間的性質のみではなく、常に同様に一の範疇的秩序 (eine Kategorie) である、この二つの秩序は決して各其自身で独立しうるような状態に結合しているのではなく、二者は直観＝範疇的 (anschaulich-kategoriale) な、其故に而も其故にのみ、雑多な内容の對象的形象となるが如き分つべからざる統一を形づくっているのである。經驗的な表象運動においては時として、二つの秩序中の一若くは他が孤立して、統覚に対して指標的な基礎を与えるものとして表れて来ることもあるが、しかし對象的認識に対すると、これらの秩序は相互に依憑し合一する。時間継起が因果關係を洞察する機会や手懸をなしているのは、全く方法論的關係であつて論理的關係ではない。この点からヒューム＝カントの問題は最も明瞭に洞察される。

構成的範疇はこの關係に由つて二つの系列に分たれ、最も主要なる代表に従つて**実・体・の・範・疇**と**因・果・性・の・範・疇**と名付けられる、何となればこれらはカントの「關係」並びに「經驗の類推」においてもまた二つの「根本要素」だからである。構成的範疇に於いて區別される「**存・在**」(das Sein) を、時には**実・在・性** (Realität, res) と名づけ、時には**現・実・在** (Wirklichkeit, Wirken) と呼ぶ。反省的範疇との結合は、この仮定の下にあつては比較的容易に理解される。存在の相等は多少同等なる多数の表象が對象的に数的に一に關係せしめられる限り**自・同** (Identität) である、相異は多少異なる多数の表象が同様に数的に一なる對象に關係せしめられる限り**変・化** (Veränderung) である、されば第一の場合には相等の維持、第二の場合には相異の時間的交替が考えられ、かくて同時に**自・同**はただ相異なるものに於いてのみ、**変・化**はただ**自・同**なるものにおいてのみ考えられる理由が明らかになる。持続的**自・同**は物 (das Ding) で、その種々に變化し行く性質に対する物の關係が、

内属の範疇 (Die Kategorie der Inhärenz) を形づくる^(ハ)、それで変化が、生成と消滅に分れるような生起を示すならば、それによつて、生起がただ物の状態の間にのみ起る理由が明らかになり、同時に同一物における内在的生起であるか、または種々の物の状態の間における超越的生起であるかの理由も解る。生起における範疇的統一は働きかけ (das Wirken) であつて、時間継起の必然性を示している、この統一は前行者が後随者の時間内における存在を規定する場合には、因果的であり、結果がその条件を規定するものと考えられる場合には、目的観的である、(この場合に注意すべきことは、目的と志向が因果的現象形式に属していて、真の目的観的現象形式に属していないことである)、必然性とは継起性 (Erfolglichkeit) か請要性 (Erforderlichkeit) かである。最後に生起から生じて来て、而も其自身に一層高度の秩序ある物であるところの物の集合 (die Ding-komplexe) に同一の区別が当てはまる、此処に於いて機械的生産の如くに、全体が其部分によつて規定されるか、または其逆に有機体或はドリーシュ [Hans Adolf Eduard Driesch, 1867-1941] の呼ぶ所に従えば個体の如くに、部分が全体によつて規定されるかである。此關係はここではそれ以上深く論ずる必要はない、ただこれらの種々の種類の構成的範疇の適用は方法論の範圍に属することを明らかにすればよい。

しかし終りに吾々が注意を払うべきことは、変化の可能性がいずれにしても凡て、物の固定的本質の裡に成立し、確立されねばならないことである。吾々は通常これを、属性が様相に対する關係と見、また種々の力又は能力の結果及び状態に対する關係という。しかし吾々が一層精密にこの關係を見るならば、それは普遍の特殊に対する關係であること、即ちかの限定の反省的關係がここでは構成的となつてゐるということが解つて来る。普遍なるものは特殊なるものに働きかける諸要素中の一つである。更に進んで次のことが明ら

かになる、即ち遍有遍無則は純粹論理的には、類概念がその全論理的範圍に妥当するの意味であるならば、吾々は生ける思惟に対して全く、類概念を其經驗的範圍に指標を与えるものと見、且つ総て個々の現実的实例の關係を規定するものと見る習慣となつてゐる。この場合序に注意されうが如くに、所謂一般的否定判断の意味は、概念的不可能から實在的除外に移り行くものである。而して最後に生起において相異なるもの、實在的關係が、事情の如何に係わらず（事實上比較されず繰返されもしない時間的繼起の存する場合にもまた）必然的と見られるのは、時間關係が普遍的規則によつて規定されるからである。吾々はこの普遍的規則を（因果的或は目的觀的）法則と呼び、この最高にして最後なる範疇において一の普遍なるものを考える、この普遍なるものはその中に理解された特殊なるものに対して、反省的のみならず構成的にも妥当する、尤も吾々にかかる「變化なる類概念」の實在性、及びこれが類概念によつて制限されたる生起に対する實在的關係に就いて、何等の表象をもつくることは出来ない。されば名目論も實在論も徹底することは出来ない、しかし純粹論理学もかかる範疇体系の構造を通じて、吾々を導いて下の如き見解に至らしめる、即ち妥当と存在とは如何に相互に克明に分つとも、終極においては完全に分つことは出来ない能力であると。

(1) エミール・ラスクは彼の『判断論』(Lehre vom Urteil. Tübingen 1912【久保虎賀壽訳岩波書店刊】)——余はこの書の校正刷から引用し得るにすぎないのは残念なことである——に於いて、二者の各の意味に於いて從來混用された二つの対立を区別しようとする面白い提案をしている（引用せる章一三頁以下）。彼の用いた術語は全体に於いて、これと全然反対なベルグマンのそれ（同章二六頁参照）よりも、目的に適つた相應しいものと

思われる。只余は「偽」(Falsch)を「正」(Richtig)に対立するものとしてよりも、「真」(Wahr)に対立するものとして用いたい。

(二) ラスクは類似の考察、基として、彼の『判断論』(五八頁)に於いて次の如き断定に到達した、即ち論理的賓辭は凡ての場合に範疇であつて、全体の「判断の材料」に關して陳述されるのである。これによつて「範疇」に關するアリストテレスとカントとの意義が相互に出来るだけ接近されるであらう。

(三) これによつてまた繫辭は主辭及び賓辭の存在を意味すべきか否か、もし意味するとせば如何なる範圍に於いてであるかという言語上より惹起される問題に關聯する種々の不必要な難點は、根柢から除かれるであらう。

(四) この區別は、選言的判断の真理価値に關する理説に対して特別の意義を有している。

(五) 余の論文『相等と自同に關し』(Über Gleichheit und Identität)【田辺・尹共訳『相等性と同一性に就いて』岩波書店刊】参照

(六) これによつて範疇を判断の種類と關係せしむるときに、カントが彼の論理学の二部門即ち形式的論理学と先驗的論理学とに原理的共通性を求めたからといつて、そのために毫もカントを非難すべき理由を認めない、この二者の内面的關係をどこまでも固守せねばならない。「先驗的分析論」の欠點は、寧ろ余の意見によれば、「判断の表」が全く歴史的に「かきあつめ」られた点に存している。何となれば四分法は決して判断の本質上から導き出されたものでなく、また導き出しうるものでもない、却つて經驗的にスコラの論理学から引き継いで、三肢分類でジンメトリッシュに支えているだけである。カントが種々に、範疇を其自身に空虚なる思维形式として、その時間的空間的直観への對象的応用から區別したときには、カント自身この正しい關係を説明している。(例えば純粹理性批判、現象と本体に關する章、参照第一版二四一頁以下、アカデミー版第四卷一五八頁以下)

(七) 同処二四三頁(第四卷二五九、二四) 第二版三〇一頁(第三卷二〇六、一〇) 参照。カントにあつてはこの事情は特に範疇と根本原理との関係において明らかに普通のことである。これに対して純粹理性批判の両版における説明形式の相違は著しく教訓的の価値を有っている。

(八) 茲では内属に属する雑多なるものの共在が空間の多次元的直観を要するか否かの問題をば全く顧みない。

三 方法論

精密に云えば方法論は其自らの原理を有っていない、方法論の原理は純粹論理学の裡に存している、で、方法論はただこの原理を個々科学の特殊認識の目的に適用することのみを取扱っている。この限りに於いて方法論は技術的・科学的である、人は之を称して学の機関 (Organon) または思惟の統整的形式の論とするのである。しかしこの場合注意せねばならないのは、凡ての方法が、ただ認識対象の論理的内容的特性をのみ考察して立てられることである、随つて諸の科学は其内容の洞察の発達と相俟つて初めて、その方法を完全に改良し精密にし拡張することである。方法の發展は明らかに個々の科学其自身に一任すればよいので、論理学は有效なる方法を見出す権利も義務もなくまた力もない、そこで少くとも論理学中の独立した一部分となつている方法論が常に問題としてゐるところは、個々の科学の結果と問題及び取扱い方を出来るだけ各方面から洞察して、その場合に論理的形式並びに規範が目的に適したものと見出せる種々の適用を明らかにすることである。従来の論理学の發達はかかることを齎している、即ちこれらの問題にとつては形式的並びに分析的論理学の規定のみが殆んど全く有効であつて、先驗的論理的の規定は有効ではない。

學並びに學的以外の思惟に対して同様に妥當なる証明及び反駁の方法を取扱つてゐるところの方法論の一般的部門にとつては、このことが全然正しいように思われていた。何となれば凡てこれらの方法は多少複雑なる種類の推理であつて、其原理は推論式論に含まれてゐるからである。しかし人が、其自身は他によつ

て証明されることなしに、自ら直接的確実性を有っていて、凡ての証明の出発点となるところの第一前提の性質に思いを趁せるときには、直にこの形式的図式論を超越するの必要に迫まれて来るのである。この前提では形式的立場から見て、判断の分量が方法的に重要となる。何となれば第一の前提は公理即ち経験によつては基礎付けられることの出来ない一般的仮定であるか、または知覚によつて与えられる事実である。唯理的科学与經驗的科学与との区別はこの（アリストテレス風の）基礎の上に立っている。併し証明を用いる体系を公理の上にのみ立てようとする理想を実現しうるのは、数多い科学の中で数学あるのみである、数学は唯一の純粹唯理的学科である。しかし吾々が其他の個々の科学を経験的と名づけるならば、それは個々の科学の基礎付けが全く事実に基づくという意味ではなく、個々の科学はその認識目的に対する公理的仮定【axiomatischer Voraussetzungen】の助けによつてのみ事実を加工しようということである。

かかる学科がその澆漓たる認識作業に於いて、この学科に自明的なる証明の過程の公理的構造を明らかに意識すること少なければ、それだけこの構造を出来うる限り体系的に築き上げることが尚以つて論理学の任務となつて来るのである。何となれば哲学は、已に余がプレンダーディエン【Präludien】（二巻一〇八頁【篠田英雄訳『序曲』下巻「四批判的方法が發生的的方法か」）に述べた如く、普遍妥当的評価の機能を經驗的に考察して規範を確定することをその問題としてゐる、この規範の真の公理的妥当は事実によつて論議されこれによつて意識されるが、しかし事実によつて論証されはしない。哲学の方法は其故に唯理的でもなければ經驗的でもなく、形式的論理学が其例によつて先ず第一に確証せねばならないように批判的である。ⁱ

i 原典とは p19（本 PDF, p29）参照であらう。

普遍より特殊へまた特殊より普遍へと進む二種の証明法を順論的・と逆論的・、演繹的方法・と帰納的方法・の名を以て呼ぶ。演繹的証明の過程は唯理的科学におけるばかりでなく、経験的 science においてもその役目を演じている。即ち推論的開展は一般的前提の種々価値を異にする性質のものにおいて可能である。一般的前提は本来の意味における公理たるを要しない、この前提は確定的規定、または仮定的概念構成並びに判断構成であり得る。最後にそれはまた多少確実なる演繹的思惟の結果であり得る。かつ凡て推理されたものの真理は制約的、即ち前提の真理価値に依属しているから、演繹的証明の結果は第一の場合のみ必然的【apodiktisch】ⁱ、これに反して第二の場合は蓋然的【problematisch】で、第三の場合はただ或然的【wahrscheinlich】である。とにかくこの凡ての場合に、或る妥当なまたは承認された普遍から特殊を得る方法を、先天的誘導（Ableitung a priori）【アプリオリな推論】と名づける、されば論理学はこの屢々誤用されたる言葉について、他の語義を成立せしめまたは生ぜしむべきではない。しかし次に経験的 science に於いても、また偶然的の証明過程ばかりでなく、往々全く演繹的なまたは、先験的性質の重要な部分をも有しているし、また有せねばならぬことは明らかである。第一の場合に例となるものは、物理的若くは化学的仮定より推理を發達せしめて行く論証である、この推理において仮定が証明される、第二の場合に例となるのは体系的法律の大部分である。帰納的証明に於いてもまた、その形式的基礎付けの原理はただ推論式論の裡に求められるのみである。さればこの点でこの証明は還元的手続を意味するので、これによって一般命題は全く推論的に包括作用に

i 原典を見ると、第二の場合は“problematisch”で「問題論的」とし、第三は“wahrscheinlich”であるので「蓋然的」が適當ではないか、他の箇所では「或然的」とはしていない、「蓋然的」としている。

よつて継起し来る単称或は特称判断に由つて確立されるのである。かかる其自身形式的では許されない推理は、基礎付けをなす判断と基礎付けられる判断との間の論理的推理によつて尚特に弁明せられねばならない。それは所謂十全推理に就いてもいわれる、この推理にあつては決して「速記文字の包括」ではなく普遍的 (generelle) (概念的普遍的) 判断をこれに相応する一般的 (universelle) (複数の若くは経験的普遍的) 判断によつて基礎付けをなすことである。この過程は主に所謂不全推理として基礎付けられるのみである、かかることを説明するには兎に角類概念の種々の実例又は種の (前提に於いて確定せられた) 同一の態度が、之によつてのみ基礎付けられるという証明が必要となる。副原因の排除と並びに種々の場合に類の性質及び推理命題において之に帰せらるべき実験以上の共通のものはないという蓋然性【Wahrscheinlichkeit】とは、その際非常に種々の方法に於いて同様にまた頗る多数の前提によつて確かにされるのである。其場合多数ということのみが其自身に決して説明するものでもなく、またそれ故にさほど必要なものでもない、何故ならば時には (例えば実験におけるが如く) 唯一の場合のみで (所謂純粹な場合として) 帰納的推理の論理的要求を充たすならば、帰納に対してはこれで十分だからである。最後の方の理説はそれゆゑに蓋然の計算【Wahrscheinlichkeitsrechnung 確率計算】と混同され得ない、蓋然の計算は数的に規定さるべき離接に基づいて而も再びこの離接を結果として生ずるから全く意味が異なっている。帰納推理の「蓋然性」はこれに反して十分なる理由による妥当を意味し、その裡に含まれている基礎付けの仕方種類を論理的に規定せねばならない。帰納の最後の仮定は合自然法則性の公準 (das Postulat der Naturgesetzmäßigkeit) である、而もそれは同一の

i 原典では S.27 (本 PDF, p39) 参照であらう。

原因が同一の結果を有するというのみでなく、同一の結果が同一の原因を有するという意味である。かく諸の状態の一義的可逆的な同時に因果的目的観的な同等は、一般に大に制限を加えてのみ予想せられ、且つ種々雑多なる原理上の危険に陥る。それ以上帰納法は類推等の凡ての補助方法を以てするも終局一の研究方法である、其結果はそれが妥当なる前提による演繹的証明と一致する場合にのみ、完全な確実性を得るのである。かくの如き帰納推理の分析に意味のあることは、その際推理の論理的意味として推論式論に属する形式的要素のみならず、構成的範疇即ち因果律が表れることである。此点から推理の方法論的理説の課題が発達する、この理説は恰かもカントの先驗論理学が形式論理学の側に位置を占むると同一の意味に於いて（形式的にして反省的なる）「推論式論」を補足するに適するのである。この萌芽は已に一部はヘーゲルの「主観的論理学」に、一部はジョン・スチュアート・ミル及びロツツェの因果的推理論の裡に育まれていたが、尚最近まではこの問題は各方面から体系的に着手されることはなかつた。

研究の方法（die Methode des Forschens）の論理的分析は更に深く認識対象の特殊性へと導く、そして方法論の最初の一般部門が形式的論理学を再び指示するならば、その第二部は已に認識論に転向するもので、総ての学的研究の考察の傍ら、認識が「対象」に対する關係に就いて人間の素朴的觀念を修正するものである。何となればここで総てを支配している決定的の原理は、対象が認識に対してそのままに与えられるものではなくて、寧ろ先ず凡ての科学から綜合的概念構成によつて生産されるということである。かかる考察は唯理の学即ち数学に關しては比較的容易で且屢々なされる。数学が構成によつて其量を生ぜしめたので、經

驗から写したものでないことは、カント以来最も確實な説として説かれている。その場合数学に於いては実に、認識作用が自ら生産した対象に対する關係が、最も深い教訓的の透徹を有している。何となればこの關係は如何にその研究が任意であろうともまたそれが如何なる数の形象または空間の形を対象としようとも、一度対象が構成せらるるや否や、認識する思维は全然対象に結合され客觀の内在的法則性に従う。問題構成及び問題解釈は、綜合的構成自身によつて作られた量關係の發展にのみ關する。数学的思维はその対象の生産が如何に自由であろうとも、その場合直に對象性の束縛を経験する、この束縛は内容上の思维から構成された複合体の裡に含まれて、この君主の權力は總て主張の恣意に抗立している。主觀的心理學の立場からは驚異中の驚異と目されているこの關係を、吾々は更に進んで對象の論理學 (die Logik des Gegenstandes) といふべき。

偕て經驗的科學に対しても亦全く同様のことが当てはまるのである。これはこの科學にあつては勿論素朴的實在論の前科學的思维習慣によつて蔽われている、が論理的考察はそれ以上に一層銳利に、如何なる認識もそれが概念的に規定した対象より他のものには關係し得ないことを明らかにすることが出来る。されば或る經驗——その裡にあつては現實在がそのものとして經驗の裡に受けとられまたは再成される——があり得ると考えるならば、そは一の錯誤である。否却て已に非恣意的知覺が極めて制限ある體驗されたものの一部を意識しようとも、かの最初の論理的作業——それは已に知覺を概念に変じた——は知覺された要素からの選択と新成【Neubildung】ⁱを意味している。而してこの過程は概念的思维の構成の裡まで進んで行く。スコ

i 原典は S. 31 (本 PDF, p44 以下) 参照とある。

ラの論理学は分析的に類概念を仕上げる際にこれを概念の内容と範囲との増減の反比例と言い表している。而して総ての他の場合に於いても同様に、学的研究の結合作用は秩序ある材料の自由なる選択並びに新に結合せる要素の創造的綜合に基づいているのである。しかし茲にも亦「対象の論理学」が一般に行われている、何となれば選択及び綜合の方向は研究の目的を確かめる観点より規定されているのであるが、新たな創造の結果はかく生産された対象の内面的必然性によつて規定されるのである。

方法論——それは諸の科学に関する一種の比較形態学である——は種々の学科に於いて対象の生産に用いる選択及び綜合が如何なる原理に依て完成されるかを研究せねばならない。この要求に随つて先ず形式的微表を研究するならば、再び一般的のものと単独的のもの (das Generelle und das Singulare) の量的対立が表れて来る。此点に於いて、法則科学と生起科学 (Gesetzwissenschaften und Ereigniswissenschaften) または法則的研究と事象的研究 (nomothetische und idiographische Forschung) を区別せねばならない。そこで形式上からいえば実に自然科学並びに文化科学という知的興味による区別が特徴となつて来る。しかしまたここで特に述べねばならないのは、この区別によつて最後の目的点と、それによつて両極端の対立とが言い表され、随つてこの両極端の間に多くの現実の科学の労作が種々の段階に分れていて、それがために——リツカートがこの関係に関する深き分析に於いて示した如くに——個々のものにあつてはただ一方の要素、または他方の要素が重く見られていることである。凡そ自然研究の最後の目的は、総ての時間的变化を除き去つた存在及び現象に関する類概念を作ることである、併しこれに到達する途が自然研究を導いて、自然研究の休息しうべきまたは度々停止せねばならないかの一回的關係の停留地に至らしめることを、この目的は否むもので

はない。何となれば現実在の法則的合理化は現実在其ものに限界を有している。他方に総て歴史研究の特殊の対象は常にその一回性に意義を有する複合体である、この複合体はこれに隣接せる価値なきものと分離することによつて表れて来るであろう。かかる複合体を理解するためには歴史は普遍的なる概念と命題とを必要とする、歴史は勿論これらの概念【Begehrte 概念】と命題とを自然科学（この点で心理学も亦自然科学に属している）から得るよりも、より多く普遍的経験から然も有効に得る習慣になつてゐる、特殊なものの特性描写は、歴史が自ら類概念の独得なる種類と合規則的なものの比較的理解とによつて可能になるのである。だから一般化及び個別化思维は絶えず相互に連絡し、相互に一者は必ず他者を必要とする。かくて個々科学の方法論の本質は、二者中の孰れがその科学の目的となりまたは孰れが其手段となるかによつて決定される。

同一の根本的差別はまた他方内容上の要素においても發展する。それで先ず注意すべきことは、方法論では人間の科学が取扱われているがために、此方法論に於いては規範的論理的なものが明らかに人間的状态に關係されねばならぬ点である。その場合自然研究は知覚の内に本質的に、類概念の構成並びに法則の発見に適當なるものを得んと考えるから、その選択や綜合に対して純粹理論的な超人的な原理を有することが明らかにになる。かかる原理を自然科学の経験的研究に適用することが、一部分人間的要求及び興味によつて規定されるという事實は、研究の方向や範圍には或る關聯を有することであるが、学的手続そのものには毫もその影響を及ぼす所はない。自然科学の方法論の規定によれば、自然科学は没価値の学である、この学が誤つて *kur' egoz'niv*（特異的）の学と見られ且つ言い表されるに至る。これに反して歴史はかの任意な現象を対象とせず、却つて再び選択及び綜合の中心点に価値意識を有するものとしての人間を置くことを指示し

ている。文化科学は人間が価値活動によって自己並びにその環境から作り出したものについて論じている。文化科学に於いて恐らく全般に行き亘る超人間的価値が如何に広く表れて来るかは、経験的としての歴史には其自身少しも関係のないことである、それは寧ろ、哲学的学科としての倫理学の任務である。方法論のみが、即ち——歴史科学のこの性質を理解し、同時にここに於いてのみ「物語」^{エルツエレ}の前科学的発端が多くの経験的な往々全く人間的な評価——それは更に歴史的科学に表れる——に従属していることを見出すところの方法論は文化科学的認識の普遍妥当性の最後の根拠が、包括的普遍的評価——倫理学がそれを人間の歴史的な活動の動因から明瞭にし得る——に存することを指示している。しかし兎に角歴史研究は価値に關係せる学である。そこでこの意味は全く、歴史研究にとつては価値意識が選択及び綜合の対象構成の原理であるということである。されば吾々が歴史の理解を「実践的」価値判断であると考えるべきでないことや、此方法論的理解が道德的無定見と毫も一致するものでないことは、この要素を真先きに体系的完全な形に於いて認めてこれを徹底させた人たるリッカートによつて、頗ぶる明晰に説明され瞭然と表れているから、再びこれを繰返す必要にないことと思う。

もし吾々が自然研究と歴史研究とを分つところの第三の要素を考察すれば、最も巧に上の誤解を避けることができる。この要素は前の範疇論に於いて論じた現象と因果性との二つの異なる型 (Typen) に関係するものである。自然科学は知覚複合体を其要素に分析し、その個々の要素の合法性則性に対する關係を研究するために、この要素を実際上若くは理想上の分類、実験若くは分析によつて要素を孤立させる。物理学・化学

i 原典とは p. 36 (本 PDF, p.50) 参照である。

及び心理学は各自その方法によつてこれを試みる。だからいうまでもなく、此等の諸学科に於いては経験の再構成は、機械的因果律によつて継起する、即ち複雑なる物理的及び心理的複合体は、全部がその部分の結果と考えられ、全然部分によつて規定されるものと考えられる。歴史的認識の範圍に於いてはこの種の対象構成は十分でない。そこで個々の人格がその計画並びに其に由る行動と共に、または民族がその言語、国家、道德、及び法律、其社会、及び宗教、その芸術、及び科学と共に取扱われようとも、即ち如何なるものが取扱われようとも、それは総ゆる種類の構造を有する人間的又は超人間的統一体であつて、吾々が有機的と呼ぶものである、そこでは部分が全体を規定すると同じく、全体が部分を規定するのである。それは極めて深き意義を有する方法的相違であつて、認識範圍の内容上の相違に於いて基礎付けられたものである。だから内容上の相違が極めて微細な推移を似て消え去つて行けば、学的取扱ひ法も其処に類似の關係を表して来るであらう。そのことは事実上から見て生命の學問 (Wissenschaft von Leben) にも適している。ここに於いては「現象の解体」は記述的科学にのみ十分であつて、歴史的要素進化論が始めて形體學的共存の事實を理解せしむるの期待を有している。しかし進化論が他方に於いて、狹義における歴史的意義を有しうるのは、進化論が自らに対して高度若くは低度として妥当する生物の段階の内に、諸種の価値關係を引き入れたからである。この關係から他の方向に問題が生ずるのであるが、ここでは僅かにこれに触れないでおく、何となればこの問題は凡ての方法論上の難問を、云わば中心に集中せしめるからである。即ち精神的生活は、自然科学的心理學的聯想の機械的因果性によつて、如何なる範圍まで理解されるかという難問となるからである。吾々は全体からしてかくいいうる、普遍と特殊との思想上の根本關係は、内域的に次の如く個々科学の三

の根本的種類に分たれるのである。この根本関係は数学的直観にあつては、生起の総ての問題から独立な全体と部分との間の関係であつて量関係が大切である。自然科学的思想にあつては普遍は抽象的概念または法則であつて、これによつて特殊はその存在及び生成を規定している、また個別的のものは個体が普遍の特別の場合として認識される時に初めて説明されるのである。文化科学的研究は一般に（ヘーゲルから表現された）具体的普遍的範疇に至る、この普遍は生ける統一から個別的のものに分れる、ここでは個別的のものが求められた要素として、価値に充ちたる全体性において認識されて、初めてそれは理解される。――

最後に経験的諸科学のかの原理的な区別を害することなしに、多数の方法論的形式は二つの形式のうち孰れが、思惟の類推的運動の種類に於いて共通であるかを確定しうるのである、その場合再び従来の論理学は歴史的方面よりも自然科学的方面によつて多くの論理学の理説を組み立てていたことが解る。論理学の研究範圍並びに論理学の方向を定めて行く場合に、已に成立せる科学の特殊の専門として分離していない科学は、前科学的表象並びに已に其の中に含まれている意見及び知識から出發せねばならない。かくするには、人々が名詞的定義と称えるところの一時的概念規定並びに、常に手近に図式的離接を有している一時的分類が役立つ。通常この二者の形式的要求は茲には貫徹されない、此要求は永久に科学的応用性を保証されなくとも満されるからである。却つて此点における研究は各科の多様な正、制限、拡充、新組織、革新を惹起する、されば全研究の結果として初めて、實際上の定義及び内容上の分類が出て来る。勿論この体系的意義は各種の学科に対して同一ではない。

しかしこの一時的のものから確定的のものへの開展全体は、事実の蒐集整序及び範疇的加工によつて成し

遂げられる——即ちそれは体験の目的を意識せる選択並びに新結合を示せる凡ての過程である。されば素朴的知覚は方法的には学的経験に変化されねばならぬ。かくの如きに至る特殊の方法は明らかに対象の特質に依る、対象の形成はそれゆえに已に得られたる対象に関する知識の程度に依繋する。知識が客観の本質に侵徹すること深きほど、それは一層精巧確實に方法をしてその特質を完成せしむるに至る。だから学は量的にも質的にも幾何学的進歩に則り、総て精神的發展の原則たる「有するものには与えられん」に随つて發達するのである。この意味で外的感官の自然科学を構成したところの觀察・及び実験の方法は、一部分は人間の感官の機能を拡充し或は精巧とし、一部分は対象を孤立せしめこれを分量的量規定を施そうとすることを目的としている。とはいえ諸の客観の数量的可規定性は、觀察の調節と同じく、自然科学の諸種の部門に全然同一の程度に適當するものではないが、しかしこれに反してこれらの特徴は心理学の根柢となつてゐる内的知覚には殆んど全く欠けてゐる、心理学は概念的分析を精密に試みて、心理学の根本事実が常に一般に熟知されるために生ずる利益を一層利用せねばならない、しかるに事実上では心理学は心理学的または所謂精神物理学的研究から僅かの補助、而もその初步の研究範圍に於いてのみ補助を期待しうるような状態である。文化科学も亦、勿論自然科学に比すれば遙かに遅れてはいたが、その事実の一義的普遍妥当の規定に達するために、広い部門に亘る批評的取扱いの術語を作つた、それは多数研究者の周密なる計画に基づいた協同労作によつて出来たものである。一部分精緻且つ有意義に發展したところの、そして豊富な多様な口牌の批判並びに解説が利用し得るところの規則及び補助手段は、従来論理学的構造から見れば十分には加工され完成されてゐない。余は此理由を、以前論理的興味が拘束を与えていた一般的方向をば別として、内容上の大なる困難に

帰する。何となればここで常に最後の仮定となつているところの意味ある理性的な事実の關係は、凡て自然科学的經驗の最高の前提となつてゐる自然という普遍的合法則性よりも、論理上詳細に規定されることが遙かに少ないからである。それゆゑに歴史的研究には各種の人格的又は超人格的生活統一の直覺的・理解の裡に、最後の方法的には決して完全に形式化されない要素が残存するのである。

このことからして、已に学における事実の確立は、方法的補助手段の道具全部及び研究の各状態に於いては従來の認識の所産を予想していることが明らかとなる。されば真正の意味に於いては純粹な記述的・科学的・ない、記述的科學は精々理論的・学科的準備段階にすぎない。前科学的記述——恐らくここに於いては知覚されたものが云い表される——すらも、普遍的意義に於いて已に知られたものとなつてゐるところの單なる言語を用いてゐる。この言語は先づ前科学的意識の不定なる普遍表象に相應してゐる、而かもこの語が科学的に明白確實に使用されうるために、論理的思惟によつて概念に造り上げられるならば、それには多數の知覚を比較することが必要である。個々のもの其自身のみでは決して学的妥当を有しない。更に進んで總て直接には體驗し得ないものを批判的に確立するには、歴史的研究におけると同じく、自然科学に於いても一般に發生的・關係の知識を必要とする、この發生的關係は事實の間にあるもので、其認識は説明的・理論の本質をなすものである。かかる總ての理由からして、事實の記述並びにその構成は、説明の根拠であるばかりでなく、この説明自身によつて再び完全に可能となるのである。

それゆゑ總ての研究は内容上の予想をなさざるを得ない、この予想は已に事實の確立の場合に働いてゐる

i 原典とは S. 31 (本 PDF: p44 以下) 参照である。

が、最後に於いてはその予想の正否が、かかる事実について試験されるのである。証明においては止むを得ないところの循環論法が、研究に於いては自ら定まった有効な補助手段である。解析幾何学がそれから構成によつて解釈の条件を導き出さんがために、或る問題を已に解かれたものとして仮定すると同じく、經驗的科学もまた仮定を用いて研究を進める、この仮定はそれから發展さるべき結果によつて始めて証明されるのである。されば帰納的研究は普遍的命題を、從属關係によつてこれから類推的実例を得んがために、蓋然的に未決定のままにしておく、この実例の事実的狀態によつて普遍的命題が証明されるか、または駁撃される、博言学的【philologisch-文献学的】歴史的解釈も、かく口牌の間隙を補いまたは邪惡を是正せんがために有意味關係の構成を出発点とする。されば仮説の論理学は研究の方法論の最も大切な部分である、かくてここにもまた論理的構造は從來歴史に対するよりも自然科学に対して一層透徹されている。人はしかし二つの範圍に、特殊的仮定と普遍的仮定（singulare und generelle）を分つことが出来る。特殊的仮定は、個々の直接には知覚されない過程の仮定を意味し、普遍的仮定はこれに対して物の本質及び作用の種類に関する普遍的概念規定を意味する。仮定の証明は初めの場合には往々補充的知覚（觀察又は実験）によつて行われるから検証といわれる。後の場合に於いては証明は還元手續であつて、そこには觀察された結果が、仮定された根拠から完全に而もこの根拠からのみ導き出されることが示されている。

經驗的科学の現実在認識（die Wirklichkeitserkenntnis）とはそれゆえに、無際限な人間の意識には決して完全に合一され得ない多数の知覚から、計画周密なる選択と綜合的結合とによつて、因果的又は目的觀的構造の多少包括的概念的關係が得られることである。現実在認識はこの意味に於いて理論と事実との一致における

る・内・在・的・真・理・を・有・す・る・。

四 認識論

学の教える所のものは、個人や人類の歴史的群集の意見及び確信に反して客観的普遍妥当性を有する、かくてこの対象の妥当性は論理的理説が之を動搖するを得ないところの、否寧ろ無条件的に是認せねばならぬものである。この結果からして論理的理説に残されている唯一の問題は、前科学的意識の仮定に随つて、普遍妥当的知識がそれが対象として自ら関係すべきところの現実在の如何に關係するかである。されば対象と現実在の素朴の同一視の修正即ち対象的思維の實在に對する關係、即ち最後には意識と存在の關係を論ずる。それゆえ「論理学」に於いて正しき思維の技術論に外ならないものに対しては、この問題及びその解釈に向けられた全研究は超論理的 (metalogisch) である、而して吾人は存在そのもの、實在そのものを論ぜずしては、意識の存在に對する關係、思維の實在に對する關係を論ずることが出来ないから、認識論の問題及び研究はまた本体論的 (ontologisch) 或は形而上學的 (metaphysisch) である。吾々は批評哲学【批判哲学】に於いては認識論は内容的即ち問題内容の点から全然古代の本体論及び形而上學の地位に位しているといわねばならぬ、しかし方法的相違が一層明瞭に力説されねばならない、この相違とは批評主義の認識論は決して絶対的實在性の独自の知識を所有すると思つたりその真似をするものでなく、却つて科学自身——認識論が其位置を無条件的に承認せねばならぬ——から、かの形而上學的諸問題に參ぜんとする論議を除き去つたこ

i 括弧は底本ではないが、原典では「Logik」と括つてゐる。

i i 原典では「getreten ist」となつてゐる。英訳では「entirely superseded」と「取つて代わる」としてゐる。

とである。しかし他方から再びこれを目して、恰も所謂科学の普遍的収獲から一の「形而上学」を寄集めんとする羸弱なる試みを、これによりて弁護するものの如く誤解してはならない。認識論の批判的方法は一般の問題に表されうる。即ち科学自身が認識の實在への関係 (das Verhältnis des Erkennens zur Realität) に関する自らの活動と洞察によつて吾人に教える所は何であるか。

それゆえに若し吾々が認識論に理論的哲学一般の最後の而も困難の問題最終の任務を割当てるならば、この概観に大切なことはこの種の問題の取扱いに對して、純粹論理学及び方法論に於いて得たものより生ずる主要なる観点を明らかにすることである。認識即ち「批評的形而上学」の眞の取扱いは、それゆえ最も普遍的方向にのみ表れうる。

認識論が取扱うべきかの根本的關係は先ず、相互に關係せる二項の詳細なる論述を要求する、意識が心的状態或は心的活動と解釈されず、まして心的本質者、心的状態の乃至心的活動の維持者たる「主観」とは考えられない、何となれば此等は凡て自ら或る現実的なもので、存在または定在が附属するもの、即ち存在するものに属している。寧ろ意識内容はこの質問に於いては、表象されたものまたは思惟されたものである、更にここに特記しておくべきことは存在するものとの關係に於ける対象的即ち普遍妥当的に思惟されたもののみがここで問題となることである。何となれば問題となれる他者即ち存在に於いても亦、凡て構成的範疇の根本意味を形成せるかの範疇的關係が考えられずに、却つてこの存在が歸するところの或るものが考えら

i 「羸弱」体が弱いこと、衰弱すること。

i i 底本では「認識問」だが「Erkenntnistheorie」である。

i i i 原典では S. 35 (本 PDF, p49) 参照である。

れている。

それゆえ対象的に考えられたものと存在するものとの関係の確定が認識論の問題に一般的形式を与えるならば、範疇論よりこの種々の解決の可能性が予知される、何となればこの関係を判断に言い表し主張するところの一の範疇が常になければならない。その場合方法論におけるが如く再び、この範疇は認識の凡ての種類、其故に凡ての科学に同一であるという偏見を棄てねばならない。かかる仮定は、恰も方法論に於いて各種の科学に普遍的方法を発見しようとして、そのために特殊の科学に保証された方法を其他の学科に強ひようと努力する弊に墮するが如く、認識論に於いても誤解に導きこれを毀損するものである。各自の対象の相違に基づく個々科学各の自律性は、対象の論理学によつて其手続方法の特異性に於いて表れるばかりでなく、個々科学が其結果に対して要求せねばならない真理の意味の特殊的色彩に於いて現れるのである。

数学と其他の科学との最も簡單なる比較が已にこのことを洞観せしめる。何となれば先ず思惟されたものと存在するものとの関係形式は、全然純粹数学には当てはまらない、さればカントも亦純粹理性批判及びプロレゴメナに於いて、数学を経験の対象への応用、即ち自然科学的理説の要素としてのみ取扱つた。これに反して、純粹数学が数論若くは綜合幾何学に於いて立てた命題の真理は、経験科学の意味における現実的なものとの関係と全然無関係であることも忘れてはならない。それにもかかわらず已に上に述べた如く対象の論理学が純粹数学の中にも存在する。カントは、プロレゴメナの最も教訓的な箇所【§33】に於いてはこれに関して、吾人は凡の如き幾何学的物に一の「性質」(Natur)を附加せざるを得ないと論じた、而してカ

i 原典とは p. 41 (本 PDF, p. 58 以下) 参照とある。

ントは其後先驗的觀念論の意味にて（實に自然科学的に応用せる数学を更に拡充して）、合法則性——幾何的形象の「性質」はこの合法則性に存する——は特殊の概念に対して悟性の構成によつて綜合的統一の条件に随ひ空間を規定するところのかの「悟性」から生ずることを示している。疑いもなくこのことはまた純粹数学にも當てはまる。ここではまた認識の対象性の逼迫は實に知性の本質にのみ含まれていようである、知性は構成自らによつて凡て内容的所与の結果を作らざるを得ない。対象のこの内容的内在的必然性こそは、認識作用の心的過程に対して其自身に存在するもの、かの過程を規範的に規定するものである、ただこの対象の内在的必然性が数学的思惟に於いて真理と虚偽との區別を可能ならしめるものである、それゆゑここにまた、普遍妥当的で真であるべきところの思惟されたものは、これより独立なるもの其自身存立するものと關係する、勿論このものは其他の語義では「實在なるもの」または「現實なるもの」とは見られないのではあるが。

それ故に吾々は凡て認識論の困難な中心点に遭遇する。何となれば言語に固著した思惟の習慣は、純粹数学の認識種類には許されない假定たる其自身存立するものを、再び幾分また實在するものと表現し、これを觀察するようになり易い。カントの例に随つてかかる「円の性質」は明らかに無（*Nichts*）ではなく或るもの（*ein Etwas*）である、而もこの或るものたるや其性状本質は、認識主觀がそれを対象とするか否かには全く無關係である、寧ろそは、認識しつゝそれに向けられる經驗的主觀の正否の規範となる。かかる或るものは其故に存在し認識を規定する、併しそれは實在性または現實在でもなければ、函数的の實在性または現實在もない。されば剩す所は或るものに独自の諸範疇の孰れによつても考えられない「存在」を附加するか、然

らずんばその状態及び認識作用への規範的意義を、特別な凡ての「存在」より本質的に異なるものとして承認し云い表すのである。これと全然一致しなくとも類似の思想の経過は、古代に於いて一方プラトンが「真なる實在」をイデーエン【イデア】（觀念）に歸し、他方ストイケルが思惟されたもの（*das Λεκτόν*）と存在（*das ὄν*）とを最高範疇としての存在（*τὸ*）の二種として併立せしめた裡に認められる。されどそこでは尚単に術語の相違をば取扱つていなかった。何となれば二途の中第一途は必然的に形而上学的両界説（*Zweireiellenlehre*）に導かれ、最高の經驗的存在とは異なる存在を認めるに至る。かくの如き形而上学的存在即ち「超越存在」【*Überssein*】は、しかしそれで確實に（經驗的）存在の「原型」（*Urbilder*）より以外の内容を有し得ない、而して其存在種類は、もしそれが「物自体」として）完全に無限定であり得ないならば、意義の存在の種類即ち結局心的である。これが歴史的にはプラトニスムスの *ἀσώματον* (*Immaterialität* 精神非物体性) とカントの *das Übersinnlichen* (超感覺的なるもの) との意義の曖昧を生ぜしめた。実に超越存在は「精神的事在性」を有することなくば、其可表象性を失うの恐れがある、ゆえにこの存在は最近の認識論及び形而上学から益々除去されて來た。併しこの転向によつて、凡ての存在は感性的なものの經驗的ものの性質を得た、しかしカントの術語に隨つて感性的なものは心的または内官の規定としての意識を含んではいるが、同時に構成的範疇、存在の關係形式の彩色は時空の直觀的要素によつてこれと全然契合する。

次にしかしロッツェが妥当（*Gelten*）なる術語を以て云い表しつつ巧に進んで行つた第二の途が一層必然

i 原典では並列して *ὅτι ὁὐτως ὅν* 【確かにあること】が記されている。

i i 原典では *„und seine Seinsart ist,“* 及び *„Seinsart“* はゲシュペルトとなつてゐる。

i i i 原典では p. 34 (本 PDF, p48) 参照である。

的となる。しかし巧に選ばれたこの語の与える言語上の便宜が、論理的使用上その語義を精密に確定すべき吾々の問題を全く解決するものではない。その場合、事實的は認と合し經驗的意義の方面から信ぜられたものと一致するところのこの語の心理的意味を先ず除去する——しかしまた、「是認さるべし」が一般的一致の公準を自らに含める限り、その規範的意義も除去される、その妥当するものが認識主観に対する關係

ボクシュラート

の規範的たると事實的たるとを問わず、二者は誘導された關係を含むのみであるが、經驗的表象の運動より独立なる要素として即自・妥・当 (das An-sich-Gellen) を予想している。この存立の仕方——それは同時に判断する一の規定を有し、また範疇論が示すが如く一部分又構成的意義を有する (それはまた自然理説及び自然自身に対する数学的關係に關しても)——この存立作用の仕方は——それは何等存在を含んでいない——今や認識論の大なる超論理的問題を形つてゐる、これは根本的には、前からカントの意識・一般の意義に對して存しているのと同じの難点である、意識一般は心理学的にも形而上学的にも解せらるべきでなく、また解せられてはならぬ、たといこの二者の危険の避難がカントに取つて著しく困難であらうとも。

二者即ち「妥当」並びに「意識一般」の形而上学的及び心理学的誤解を除いて、その後に残るものは、余の考えによれば、存在するものの間に成立する關・聯・及・び・關・係の總体に外ならない。これらは物として存在するのでもなく、状態または活動として存在するのでもない、これらは認識の心的機能の内容としてのみ現實的となりうる、妥当の王国は、其自身には存在するものが依つて立つて形式と秩序とに外ならない。これらの形式は其自身妥当し、存在するものに対して妥当し、認識作用に對して妥当する、存在に對する妥当、また認識に對する形式の妥当は、ただ形式自身の有する純粹内面的妥当にのみ基づく。存在するものが

この形式と秩序とを生ぜしむるのでもなく、認識がこの形式と秩序とを生産するのでもない、却つてこの形式によらざる存在なきが如く、この形式を考えない認識にない。妥当と存在との関係は算数学的と同様に数学的及び幾何学的なるものの凡てに当てはまる、されば凡て純粹論理的なもの、反省的範疇並びに構成的範疇にも当てはまる。何となれば反省的範疇系列の思惟法則も存在するものの形式及び秩序を意味せる公準に基礎付けられているからである。ⁱ

かかる妥当と存在との関係——それは形式と内容との関係に外ならない——は認識作用の分析が到達し得ない最も遠い点で決して誘導され得ない点である。妥当が意味している存在するものの秩序は、存在自身と全然無関係のものではない、が存在の裡に含まれているものでもなければまた存在より生ずるものでもない、却つて存在に於いて活動せるもの、類似として依属しているものである。さればかかる関係——それは再び妥当と存在との最高統一点を指示するに至るであろう——を明らかにすることは全然不可能である。されば此点よりして超論理的思弁は唯心論的形而上学 (die spiritualistische Metaphysik) より他の進路を取るものがないことが解る。吾々が不可能なるものを可能にしようと欲するならば、吾々が存在及び認識を同一に規定するところの妥当の形式を、また存在するものの現実なものとして表象しようとさえもするならば、これらは吾々に認識の客観として、即ち精神的實在の裡に与えられているのであるから、妥当の形式関係を「精神上的の秩序」と考え、この秩序を精神的本質者に結合せんとする外に道はないようである。ライプニッツの中心モナード、バークレーの神、カントの知性本型、フイヒテの我、ヘーゲルの理念は凡てこれらの多少定言的

i 原典は p. 24ff (本 PDF: p35 ズム) 参照せよ。

或は蓋然的に定立された問題を有している。妥当を一種の心的存在または超越存在と解せんとする試みに於いてのみ、少くとも常にかかる世界支配の精神性と吾々人間の精神との間には——スピノザ流に云えば——星像における犬と吠えている動物なる犬との如き類似の存することを忘れてはならない。

このことは人間の認識には妥当と存在との間に尚他の関係、即ち形式と内容との分離があるために直に明らかになる。古代の本体論及び形而上学の最後の問題はこうであつた、認識の妥当的規定的形式に存する仮定は経験の事実¹に於いては全く充されない、「概念の加工」(die Bearbeitung der Begriffe)——ヘルバルトはここに哲学の本質を認めた——は、形式と内容との素朴であるが達せれない結合を書き改めて、形式と内容とは相互に満足しているとした、この形式と内容との二律背反はしかし人間認識の本質からは除去され得ないものである、これは恰も普遍一般的理性要素に基礎付けられた形式は、人間経験の断片的な浅薄に証明された内容を全然また純粹に支配し得ないことを示しているようである。されば人間の経験に於ける及び科学に於ける対象構成²(die Gegenstandsbildung)は常に一時的である、されば純粹形式を対象的に考えようとする試みは、必然的にその内容凡てを空虚なものとし、それゆゑ経験の知的会得に対して役立たなくなる。されば内属の範疇には持続的同一の仮定が含まれている、しかし知覚の「事物」の何れもこの範疇を満足せしめない、されば科学は知覚の事物に真なる本来の事物としての実体の概念を強いる、而してこの概念は物理学化学生物学心理学の如き特殊学科の構成要求に従属しているから、この思想過程は物其自身の概念に至つて完成するこの物其自身が完全な無内容となれば、範疇の意味を為せる雑多なもの³の統一が止揚されて、最

i 「形式と内容との二律背反」は「antinomismus」「律法主義」の意訳。

も著しい意味に於いて無対象となる。認識の開展に起ると同様の悲劇が現象の研究にも表れる、この研究にあつては、因果関係の要素分解が、経験より出発して深く進むほど、其分解は生きた働きかけの感じを失うが、しかし其処には尚前件と後件との間の総合的關係のみが存立する。かく存在が二律背反的に妥当に到達し得ないのは、結局またプラトンに意義を有した事実、即ち存在するものに於ける数学的關係は決して純粹に現実化されない、ことを想起させる。ここでは主として倫理学的意識及び美学的意識の類推的不可觸の二律背反を指示するのである、即ち一般に人間の理性生活には、存在と生起に羅織せる超人間的普遍的妥当者がある、この妥当者は存在に附着することは出来るが、存在に完全に同化されることは出来ない。Προϋπείταί μὲν πάντα τοιαῦτα εἶναι οὐκ ἐκείν, ἐστὶ δὲ αὐτοῦ φρονήματα (Plato, Phäd. 75b). —

今やここから再び次の如き思想、即ち認識論の問題解決の種々の可能性は範疇論から觀察されねばならぬ、何となれば対象的に思惟されたものと存在するものとの關係は或る範疇によつて規定されねばならぬからという思想に歸り来らんか、——先ず素朴的意識や進んでは更に科学的思惟に至るまでも超越的真理の根本理解として此關係は反省の原範疇 (Ur-kategorie) 即ち相等 (Gleichheit) であることが明らかになる。それは素朴的實在論の立脚地である、即ち世界は知覚される如く存在する。かかる表象方法が吾人の外的自然の知識に關係する以上、経験科学によりて一步一步破壊されて行くことは、茲で更に詳細に論述することを要しない。余の觀察にして誤なくんばここには只内的知覚のみが残る、模写性が内的知覚において体験を再成する記

i プラトン『ファイドン (パイドン)』「しかもそれより劣つているとしても、我々はそれらをかのものに引き当てて、開陳付けることが出来まいと思う。」菊池慧一郎訳、底本では幾つか原典と異なっているが、原典も公開されている希臘語版と三点異なる。ここは原典に合わせた。菊池慧一郎訳『パイドン』"Phaedo" 75b

憶の真理徴表として妥当する、存在するものそれ自らが意識であるところのここに於いてのみ、また存在に關する知識は存在其自身であるか、又は存在を直接に繰返す表象であり得る、即ちその間に入り来るものによつて決して変ぜられも濁られもしない模写であり得る。それゆえ心理学のみがかの素朴的真理概念を満足せしめ得るのである。而も心理学も只原理的でただ方法的に記憶の本質から導き出される厳格な制限を加えてのみ満足せしめるのである。何となればこの学は自ら秩序付け撰択し補充し改容する統覚の法則に隨つてゐるからである。これに反し外界の事物に關しては、自然科学は久しい以前から事物に關する吾人の知覺的知識を古代の症候学 (seneiōtik) の見地から觀察し、其要素間に全く知覺的意識への働きかけではあるが其故に模写ではないところの一義的記号の体系を認めんとするのである。されば自然科学は認識と存在との關係、因果性の範疇に向うのである、さればかかる解釈の推理の結果は、真理の代りに記号及びその結合の便宜を置換えるのである。以前の素直な症候学は、かかる解釈の理論的意味を解して、凡て感官的知覺の事實はかかるものとしては實在的ではなく「單なる」表象、當時の人の用語によれば觀念であるとした、其は觀念論なる名称の歴史の意味であつて、他の意味に由つて混乱されることは出来ない、觀念論はそれゆえに感覺の事實から存在を奪ひ去るのでなく、この事實に心理的存在種類が附加されることを意味している、されば——一般の意見を物ともせず——ロツツェが嘗つていつた如く意識内の事物のかかる作用の盛に行われることは、事物間に其他に生起しうる爾余の一切のものに比し、言い尽されぬほど価値多きものであるといふことが、少しも価値を減じないのはこの点に由るからである。

i "seneiōtik" は "semiōtik" と同じで「意義論」あるいは「記号論」(英訳では Symbolism) という訳もある。

しかし思惟されたものと存在するものとの同一を廃棄するのは、結局只部分的であつて決して全体的ではない、何となれば経験的意識内容として思惟されたものは（歴史上凡ての觀念論が直に唯心論に急変するのが文献によつて明らかなるが如く）それ自身尚一の存在である。されば此方向に於いて多様な認識論的可能性がある、その可能は種々の表象されたものの症候的見地【記号論的見地】から見るために區別されるのである。初步の感覺的實在論は感官的知覚の事実を實在と考え、名目論的処方によつて凡ての概念及び論理的關係の裡に、この事實の意識への作用のみを見るに反し、唯理論的實在論は感官性質の主觀性説と概念の内に眞の事物を模写せんとする企図とを結び付けている。唯理論的實在論は自然科学的理説の数学的實在として、感官的事実を空間時間運動の分量的規定に於いて考えるか、古代形而上学の本体論的實在として純粹範疇的關係に於いてのみを考えるかである、——しかし何れにしても世界はそが必然的に思惟される如くに存在するという「独断的」前提に基づいている。

認識論の範疇的可能の図式を紡ぎ出したり、または実証主義独我論の如き歴史上の珍奇なものをこの図形に入れて見ることを読者の考えに委ねて、余は只思惟されたものとの關係を顯著に表そうとするのである。症候學的觀念論的理解は好んで、その理解が依つて以て出発点となせるかの原因と結果との關係を本体と現象との關係と混同する、この關係は稍他の和げられたところの、而して内属の範疇系列に含まれたところの意義を有している。「現象」は一方では或るものが他のものから區別される仕方を意味し、しかし他方では本体が其狀態及び結果に表れる仕方を意味している。されば唯現象論 (phänomenalismus) が二種の語義を結合して、人間認識の意識内容を解して、存在するものの本体が或る方法で表れるところの或る現象と見よ

うと欲するならば、これに對して非難の仕様はない。されど近代哲学は多くこれを徹底せず、却つて一面的に且つ故意に本体と現象の不相等を強調する。本体が現象よりも他のものでなければならぬことや、それゆゑに現象の質的規定を移して本体の規定となすことを得ないことなどは、殆んど公理的に承認されている。

「現実の事物」に何等知覚の質的内容を認めないで、却つて知覚内容を全然量的に規定しようとする自然科学的觀念論は本体と現象との不相等を原理として採用した、それ故に後に至つて空間的時間的要素が現象に這入つて来ようとも、また心的状態が現象に取入れられて来ようとも、物其自身——それは現象より全然異つておらねばならない——にとつては、絶對的に如何なる体験の内容も存してはいない。されば唯現象論は不可知論 (Agnosticism) となつた。しかし物其自身と現象との不相等は決して基礎付けられない、随つて主張されることも出来ずに、ただ蓋然的に考えられるのみである。この不相等はまた因果關係からも出て来ない、何となれば因果關係は其自身に原因と結果との相等を許すからである。

さればこの認識論上の根本問題はかかる批評的修正に於いては、結局實在科学の洞察の裡に於いて經驗され学的に加工されうる存在を、其れより高き存在の現象即ち後に至つて質的他者並びに不認識として妥当するに至るべき物其自身のような超越存在の現象として主張するがごとき論議が存するや否やの問題を取扱うこととなる。余の見る限りこの問題を肯定せんとする理論的論議は生じ得ない、人間認識の限界は寧ろ他の方向にある。凡て学的認識は方法論が示すがごとく現実在よりの切断である、かかる切断はそのものとしては綜合的完体に於いて決して存在するものではない。この意味で対象に属するものは存在でなく妥当である、とは云え対象は存在の單なる要素を含み、且つこの要素をこの存在するものに妥当するが如き或る關係に結

合するのである。事實的なものの如何なる記述も、常に其の目的とせる現実在を完全に理解することも模写することも出来ない、併し記述は選択された要素を結合して或る形式——この形式はその現実的關係に適するのである——とすることが出来る。しかし諸の理説にも同一のことがしかも一層高い程度で妥当する。自然科学の類概念及び法則は抽象で、而かもそれ自身は凡ての特殊から離れては「存在」し得ない抽象ではある、が然し類概念及び法則は凡て特殊を自らの下に包括し、それに妥当しこの自然を現実^にに成立たしめるところの秩序である。最後に文化科学の事象は無際限の多くの生起から、確實に種々の關係を引き出し準備する、この關係たるやただ其自身として、即ち其が現実在に於いて共に成長し來つた凡ての無關係なるものを全く容れないで孤立しては、決して自らの任務を尽し得ない、しかし歴史研究の対象を叙述するこの諸關係は、現実的生起に現実^にに存在している価値ある意味をのみ明らかにするのである。

されば科学は各々宇宙より精神的コスモス並びに歴史的コスモスより、各自の「対象」に於いて各一の小さな世界を象出する、この世界は僅かに一片にすぎないがしかもかの大世界の一片である。この特殊の認識世界の背後に尚一の高い存在が潜んでいて、認識世界はその現象として内容上全然これと異なっているであろうと考えるべき手懸を吾々は有たない。が吾々の知識に対して加工する諸断片の間には、確かに他の断片、他の「世界」がある、その世界は一部分已に吾々の外的經驗及び内的經驗、または吾々の選択的綜合が到達し得ないものである。個々の科学の分野である凡ての特殊の世界は、各自の限界に於いて何処でも自己以上を指示していることによつて、吾々はこのことを知る。

かかる選択的認識論に対しては、カントの先驗的弁証論の本来の意味に於ける「無制約者」は「制約者」

の全体以上ではない、さればこの認識論は、物其自身を他の全く性質を異にするものに變ぜしむるが如き飛躍 (Mercoledì eis állo yevos) を要しない。しかしこの全体は尚認識し得ないという点で古い独断的意義の形而上学を除外するには十分である。

吾々人間はかかる吾人の知識の零細なもので諦めねばならぬ。その代りに知識は芸術並びに道德的生活におけると同じく吾々自らの製作——精神からの新たな創造である。勿論凡て現実在の統一的關係のポスチュラート【仮定・公理】はまた、一の關係に即ちその人間を超越せる妥当が吾々に知られている關係に、属してはいる。が此全体——吾人は其僅かなる碎片しか知り得ない——は吾々の知識の到達し得ないものである。されば吾々の捕捉し得る碎片を補綴して、それによつて全体を得ようとするのは望みのないことである。知識と存在との、また研究しうべきものと研究しえざるものとの範疇的關係は、現象と物其自身との關係でなく、部分的の全体に対する關係である。絶対的の現実在は、知られた存在と質的に異なるものではなく、統一的に生ける全体である、吾々はこれを知識の世界に像出せんがためには其全体の中より碎片しか取り出さない。しかしこの全体は、もしそれが一の範疇によつて考えられるならば、実に其自身に組織ある有機体であつて、その部分を集めて作り上げられるものではない。されば、諸科学からの借物を寄せ集めてなせる形而上学の諸々の新たな試みは、古代の本体論よりも尚遙かに憐れなものである。古代の本体論は少くとも、妥当の王国から組織の全体としての普遍の關係を模造するの元氣を有していた。吾々は已に人間にはかかることが禁ぜられていることを見た、そこで吾々に残っているのは、「これで一歩進んだ」というゲーテの句の有する希望を以て、吾々が形像しうる個々の認識世界を不断の労作によつて樹立することである。

(二) 例えばカントにおける著しき転向、プロレゴメナ第五七章、アカデミー版四卷三五、二参照。

底本…『論理学の原理』

大村書店大正十年三月二十三日発行

翻訳者 竹佐哲雄

人名変換…「シグワート」↪「ジクヴァルト」、「アリストテレース」↪「アリストテレス」、「プラト」↪「プラトン」、「ツリーシュ」↪「ドリーシュ」

作成者…石井彰文

作成日：2013.10.29